

折紙探偵団新聞

今年も夏は
大忙しの
21号

折紙博物誌

— 前川 淳 —

§2.5 マセマティカ・オリガミア（承前）

📄 おりがみと... 📄

この連載「折紙博物誌」の主眼はおりがみを学際的にとらえ、幅広い視点から見渡すための序説として、おりがみに関わるものをかたっぱしから列挙するというにある。

「博物誌」たるゆえんだ。いわく、「おりがみと文学」、「おりがみと物理学」、「おりがみと工学」、「おりがみと生物学」、「おりがみと化学」、「おりがみと民俗学」、「おりがみと教育」、「おりがみと臨床心理学」、「おりがみと建築」、むろん、「おりがみと美術」。

「おりがみと刑事訴訟法」などと言いださないことから、わたしが何の脈絡もなく上の「おりがみと何々」を挙げたのではないことを理解してもらいたい。それぞれに興味深い話題があり、迫って紹介するつもりである。

📄 数学との関わり 📄

おりがみを窓口にして広がる世界の広さは驚くほどだが、その中で最も豊饒なのはやはり「おりがみと数学」だろう。ここではとりあえず、「おりがみと数学」について、簡単な見取り図をつくることを試みる。下のもっともらしい図で説明しよう。おりがみと数学（幾何学）の関わりを5つのカテゴリーに分けて分類整理したものだが、それぞれが互いに重なりあっているということも表している。まあ、いい加減な思いつきの図であるから、そんなに真剣に見てもらっても困るが、それぞれのカテゴリーはざっと次のようなものだ。

まず、「作図題」であるが、これは、紙についた線が作る図形を主たる関心の対象にするものだ。阿部恒氏の「任意の角の3等分」、藤田文

章氏の「正7角形の作図」、芳賀和夫氏の「芳賀定理」などが代表である。次の「設計」は、わたしの「ビバ！おりがみ」（サンリオ）や目黒俊幸氏の「実用折紙設計法」など、いわゆる「おりがみ作品」を作る際の理論に関するものだ。両者の交わるところに伏見康治氏の「内心の定理」などがあることになる。「多面体・多角形」と幾何学との関係はいわずもがなであるが、ユニットおりがみや畳紙（たとう）も視野に入れている。次の「対称性」が少しわかりにくいかも知れない。例えば、ユニットおりがみを組み上げる際に色分けを考慮することなども対称性の問題である。他のカテゴリーでも対称性の果たす役割は大きい。が、ここでは、あまり広く知られていないと思われる対称性に関する話題を2つ3つ提供してみたい。

岩波新書「分子と宇宙」（木原太郎氏）の中におりがみ作品を「点群」によって分類する話題が出ている。

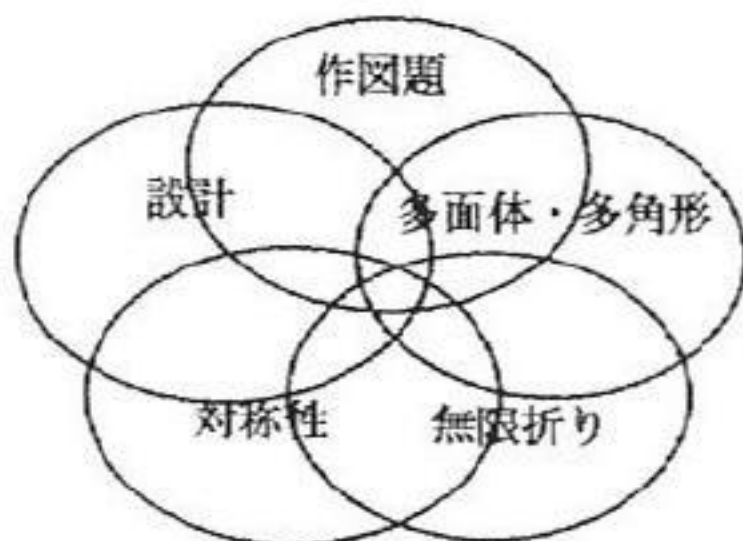
「点群」というのは、結晶や分子の構造を分類するのに使用される数学の概念である。そういつてもピンとこないかもしれないが、鏡映対称とか回転対称といった言葉が用いられるといえ、雰囲気はわかってもらえるだろう。かれこれ15年前に初めてこの木原氏の著書に接したときは、ふーんという程度のものであったが、その後、川崎敏和氏の「表裏

同等折り」（「トップおりがみ」（サンリオ））とこれを結びつけて考えたとき、「表裏同等折り」が回反対称（回転させて座標を反転させる）にあたると思ったり、何か目が開けたような思いがした。知識によって作品を見る目が広がり、新たな作品が生まれるということはよくあることで、わたし自身もそういった作品をいくつか考案し、それらの作品の不思議さのようなものを楽しんでいる。

対称性の分野では川崎氏がパイオニアとなったものが他にもある。藤本修三氏や桃谷好英氏の作品を大きく発展させた「平面結晶おりがみ」がそれだ。「平面結晶おりがみ」というのは、平面に折り畳まれた折り目のパターンが縦横につらなってタペストリーのようにになっているもので、対称性のかたまりといった作品になっている。

もうひとつのカテゴリー「無限折り」であるが、これもまた川崎氏が大きく切り開いた分野だ。「平面結晶おりがみ」も大きな紙で折ればどこまででも折れるという意味で「無限折り」と言えるかもしれない。他にも氏には、名作「巻き貝」をはじめとする無限折り作品があり、それらに魅せられたひとは多いだろう。わたしもそのひとりで、最近凝っている自己相似おりがみ・フラクタルおりがみのヒントのひとつとなっている。布施知子氏の「らせんをおろう」（筑摩書房）のらせん作品群もこれに入れていいかもしれない。駆け足で見渡したので、言い残したことや見落としたことも多い。この他にも高次元おりがみ（これも川崎氏が先鞭をつけている）といった話題があるが、今回はとりあえずここまでにする。

実例という意味でも作品の発表もしたいのだが、書きたいこと、あるいは、ここで書いておくべきだと思われることが多くて、今回も字ばかりになった。いったい何人のひとが読んでいるのか心配でアリマス。





「いせ辰」の忠臣蔵発見



季刊『をる』の創刊号の拙稿では資料整理中であることが出来ない旨を紹介しておいた「いせ辰」所蔵本の『折形手本忠臣蔵』がやっと見つかった。コピーを頂戴することができた。四代目「いせ辰」こと廣瀬辰五郎氏の最初の著書『日本の紙芸』（ルック社、昭和44年刊）に極めて不鮮明ではあるが写真が掲載されているということを知り、中西康夫さんから教えて頂いてから、何年たっただろうか。中西さんが閲覧申し込みをしてから数えると二十数年というより三十年近くの歳月がたっている。数年前に、思いがけない機会があって、鈴木真二現社長にお願いしてあったのだが、改築に際して資料はすべて梱包して岩槻の方に保管してあるとのことで、所在の確認も出来な

いでいたものだった。鈴木社長からは毎年ご丁寧に資料整理調査の結果発見できなかった由の連絡を頂いていたが、今年の7月はじめに発見の報と共に原寸大コピーが到着したの

おりがみ庵

ひとりごと
岡村昌夫

第9回

で大感激である。

詳細は季刊『をる』の次々号に書きたいが、スペースの関係でどうなるか分からない。取り敢えずここで一端を紹介しておこう。

・・・「いせ辰」本の内容・・・

まず2枚続きのうちの2枚目の折り方途中図と広告欄の部分だけで、左右の両端が失われている。これは『日本の紙芸』に掲載された写真が全部であった。従って残念ながら版元名などは不明である。板本は、他本とは全く別物で、板下の筆跡も異なり、全体の大きさがやや小さくてA3判1枚で完全にコピーできる。右端の基礎折りの部分は、欠けてはいるが他本と同じ内容であることが明確である。ということは内山光弘氏が昭和7年ごろ写したとされるものとは異なっているのだが、この写本のことは別の機会に書きたいと思う。

広告欄の最左端の著者の住所は推定どおり「南茅場丁薬師地内」だったが、著者名は「森本一徳」ではなくて「松本一徳」であった。「松」の字が上に「木」下に「公」を書く字体だったので、「森」に見えていたのだが、明らかに「松」である。これは仙鶴堂とも名乗る人物であるがこれで姓が明確になった。（高木智氏の『古典にみる折り紙』33ページ参照）

・・・ 広告欄の内容・・・

諸禮御折形 武具馬具共百三十七品
数九十六御箱入

此書ハいろは付合印丁数くり出し全
本諸礼折形ハしくかな書にて認候書
也右一部の小冊箱入折形に相添賣出し
置候間御求御一覽被遊可被下候

千歳遊折形鑑出版

此書ハ紙の大きさ一部
四方の折紙にて百色の鶴
を折て自由自在の姿を顕
しことごとく紙の切形折
形共さまさまの工夫致其外花鳥魚獸
草木花実器財何によらず新作めつら
しき折形ハしくかな書にて顕し置
候へば女中様方御子様方迄御心やす
く百色の鶴の形を見るが如くに折上
り申候間御もとめ御一覽被遊可被下
候様奉希候

南茅場丁薬師地内 松本一徳 撰

・・・問題点いくつか・・・

特に『千歳遊折形鑑』は、高木氏の『古典にみる折り紙』に紹介されている『稚遊教へ草』に広告されている『千年遊折形鑑』と同じものであることがかなりはっきりしていると同時に、実際に出版されてはいないということも推測されるのである。それも別に書くつもりである。

「一部四方の折紙にて百色の鶴を折て」という部分が極めて注目される。まず「折紙」という語が現代と同じように「折る用紙」の意味で使用されているのは全く初見であった。「一部四方」は意味不明だが、『稚遊教へ草』に同人が「一分四方」とも「一步四方」とも書いているから「部」「分」「歩」は「ぶ」と読む語の当て字であろう。長さの単位としての「分」だったら3ミリ四方ぐらいの紙で折ることになり、面積の単位としての「歩」なら2メートル四方ぐらいの紙になってしまうし、第一それでは「四方」とは言わないだろう。「百色の鶴」というのは100種類のつなぎ折り鶴だろうから、「百鶴」の意味ではあるまい。ここのところどう考えるべきか、紙の大きさを表すことには「一ぶ四方」があるかどうか、ご存じの向きは是非ご教示ねがいたい。



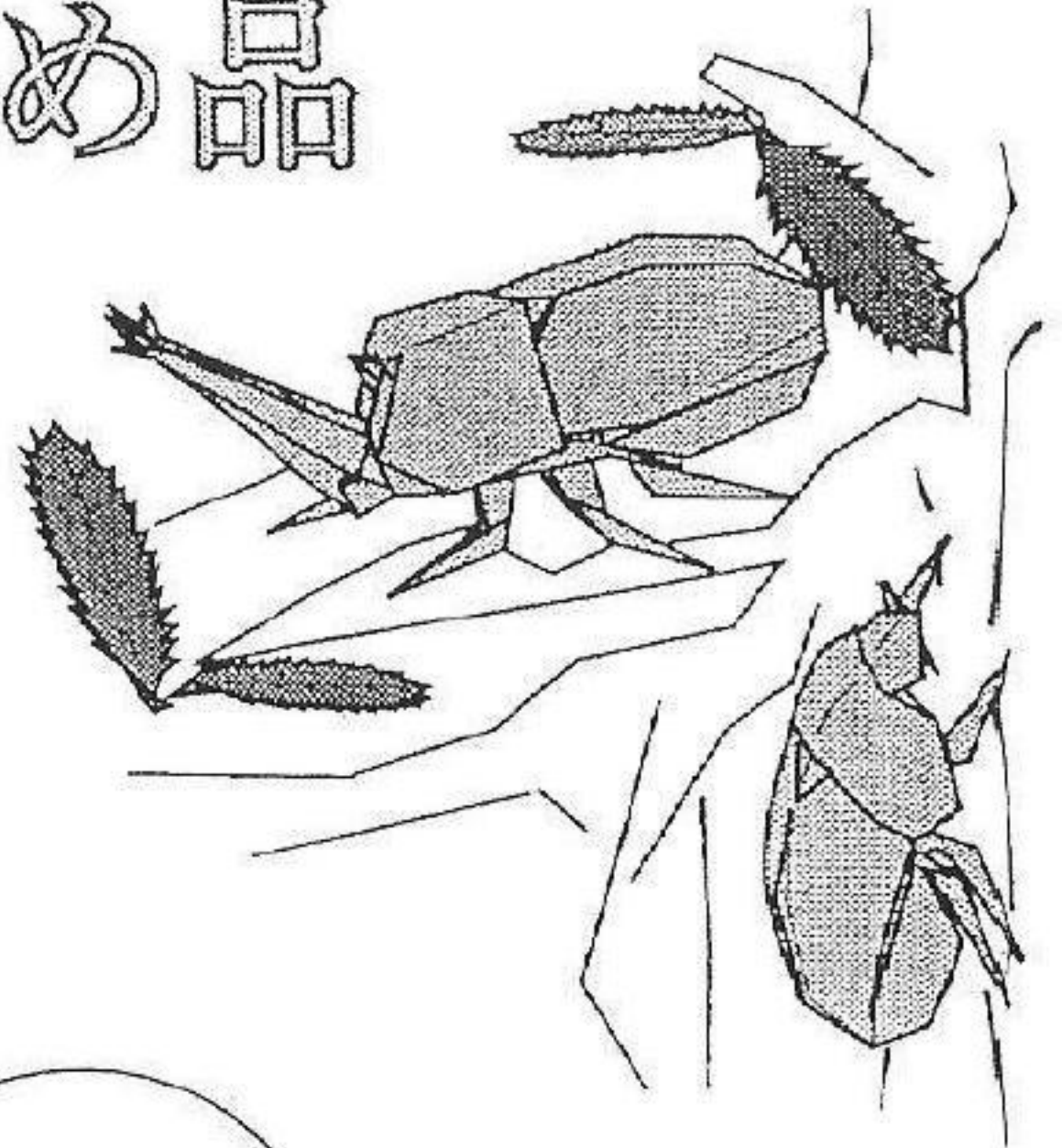
料理長のお褒め品

今日のメニュー

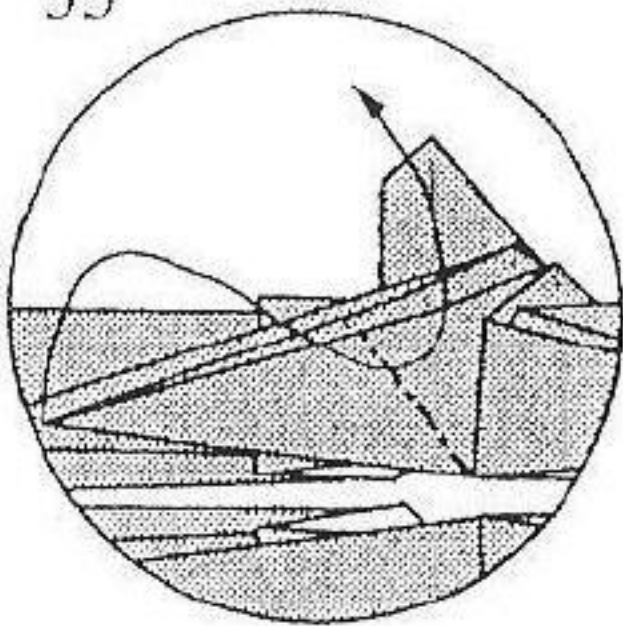
かぶとむし

オス 後編

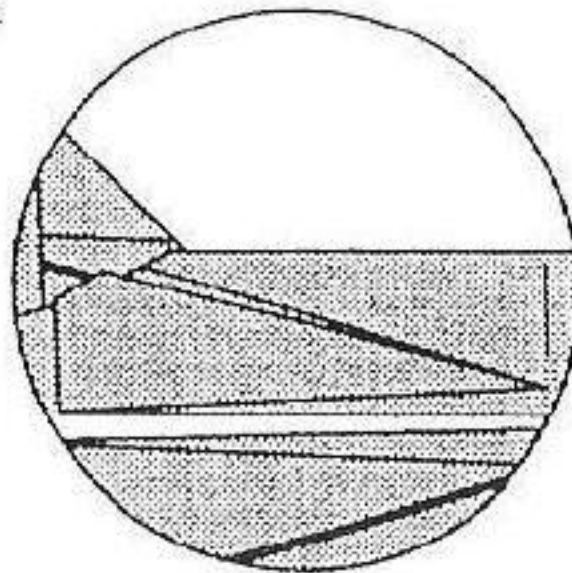
料理長 西川誠司
Seiji Nishikawa



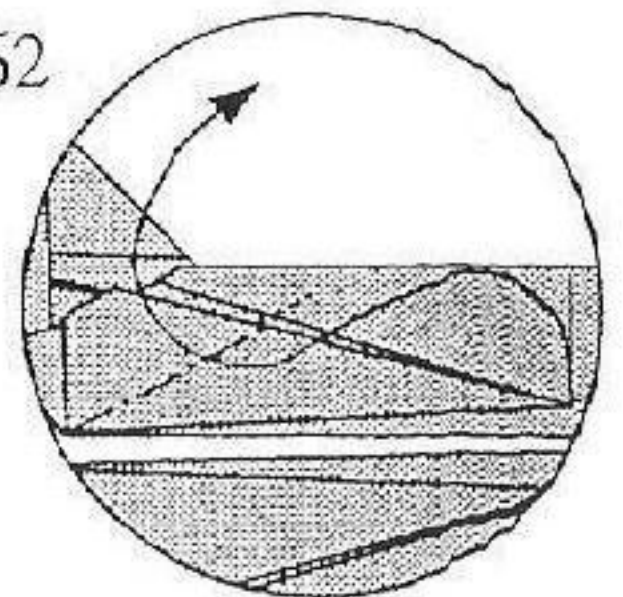
55



61

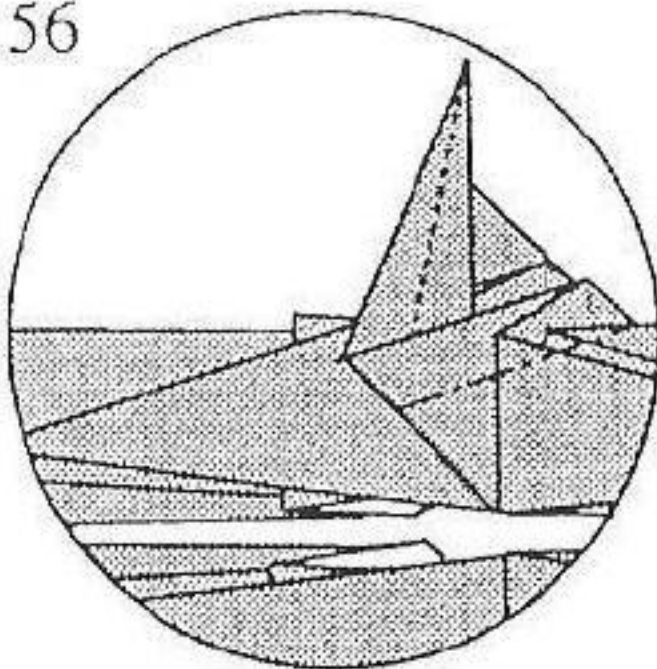


62

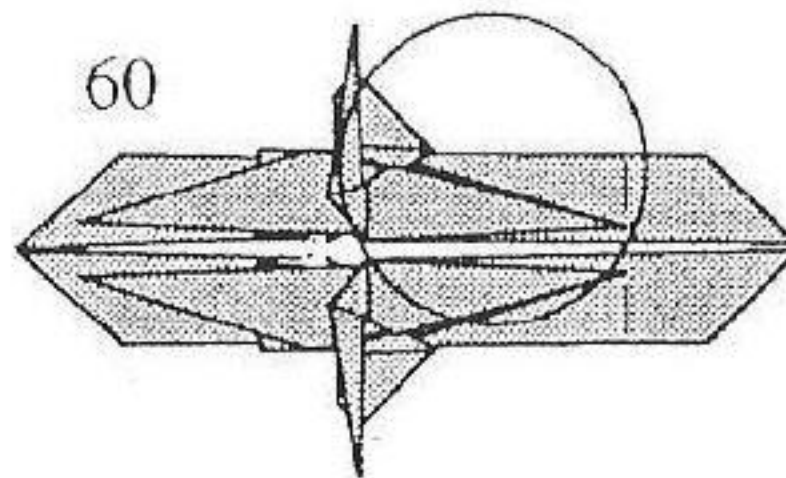


中割り折り

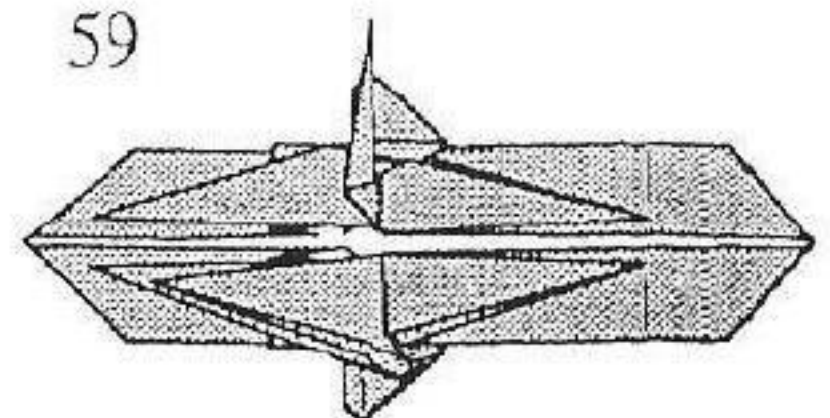
56



60

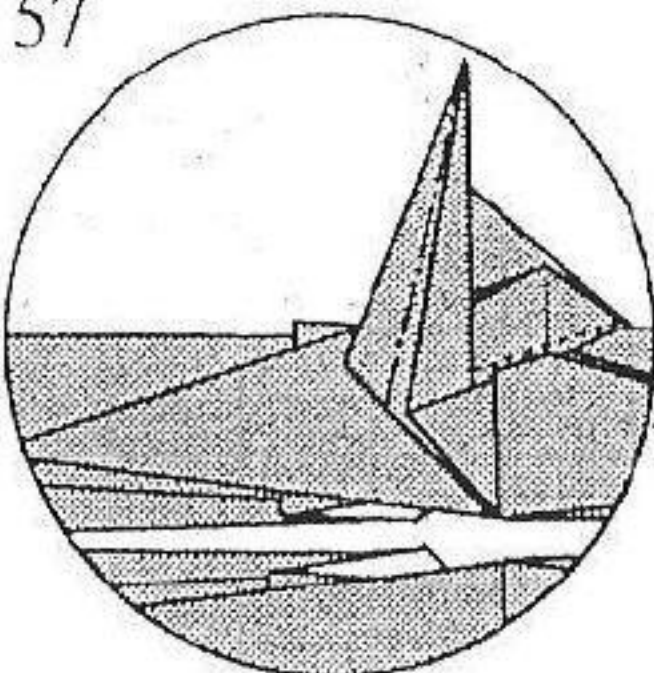


59

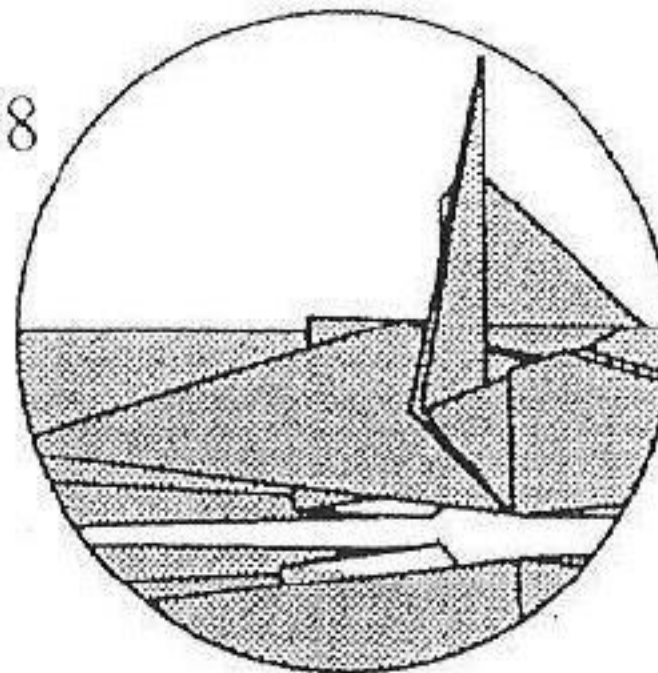


反対側も同様に

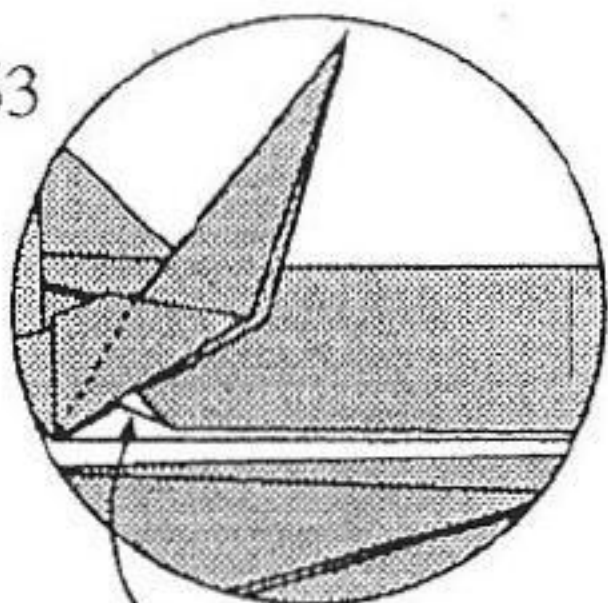
57



58

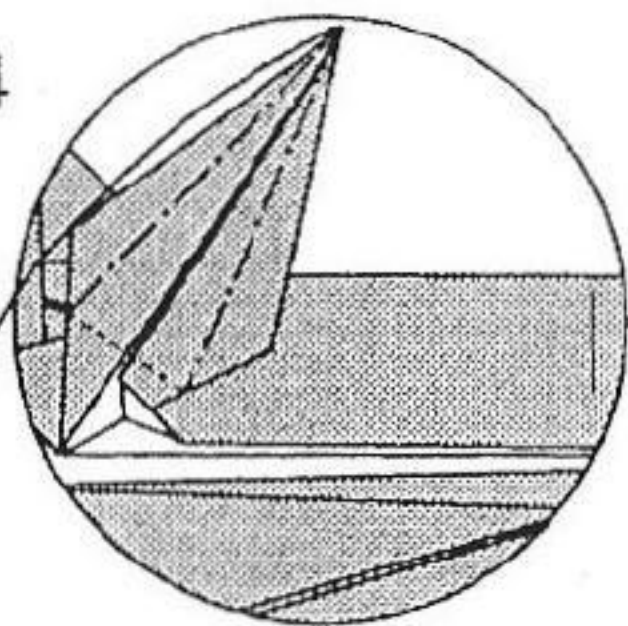


63

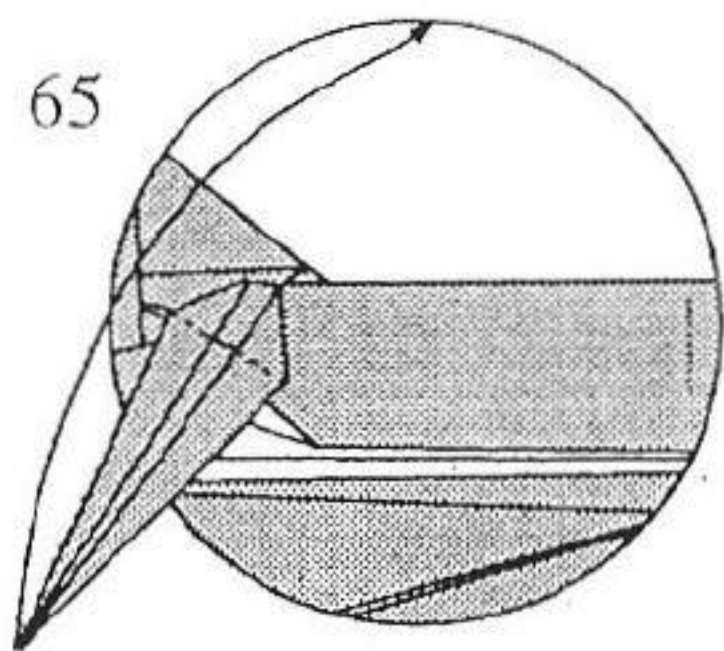


引っぱられているこ
とに注意

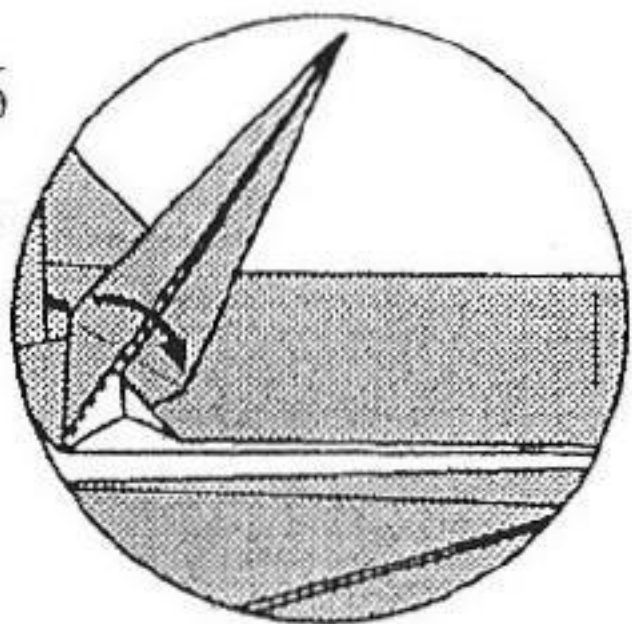
64



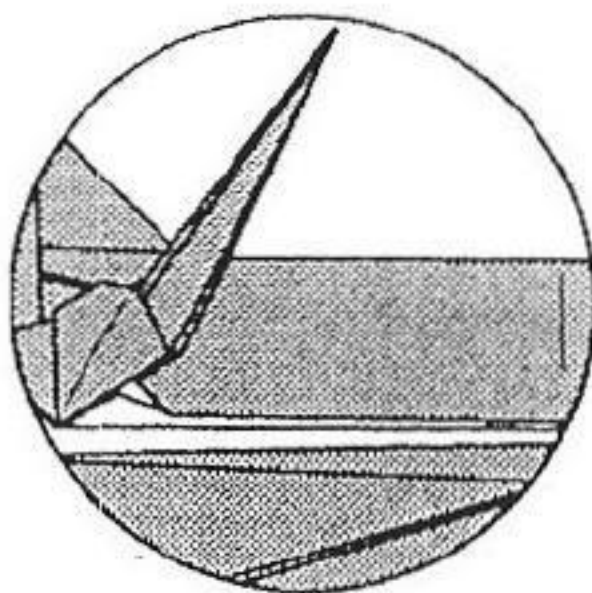
65



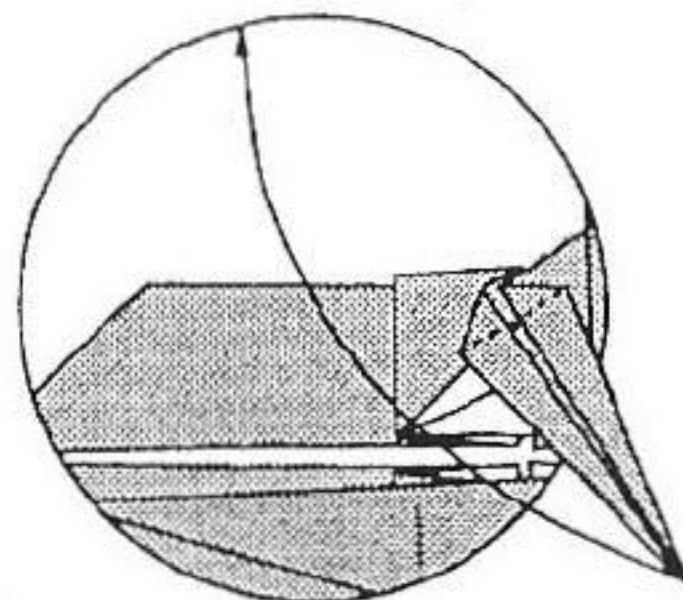
66



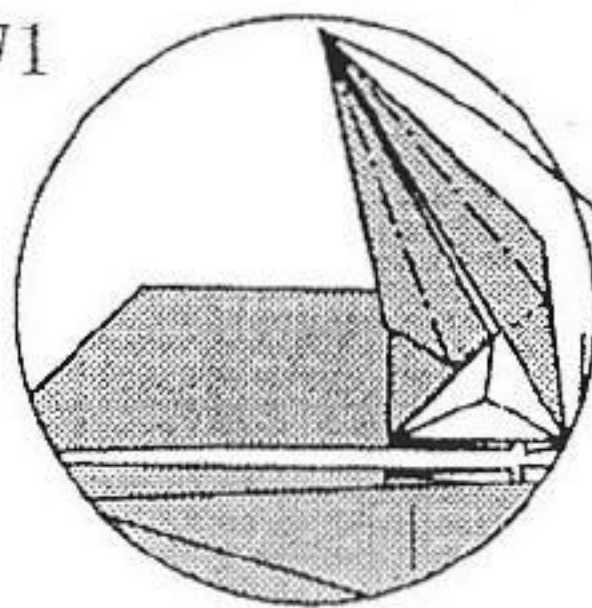
67



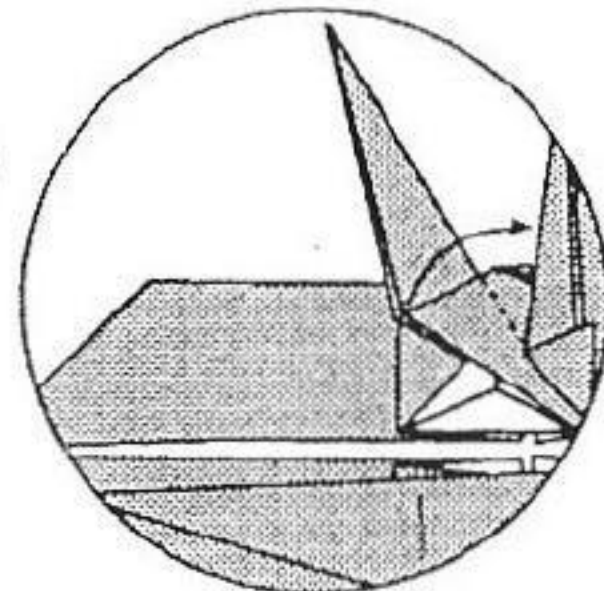
72



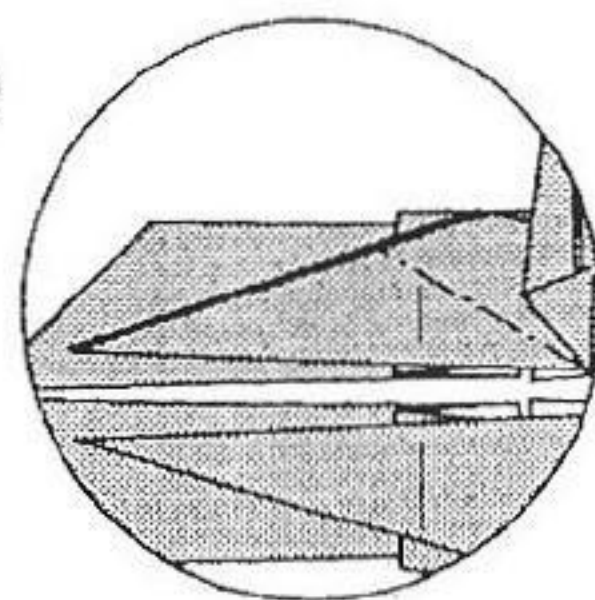
71



70

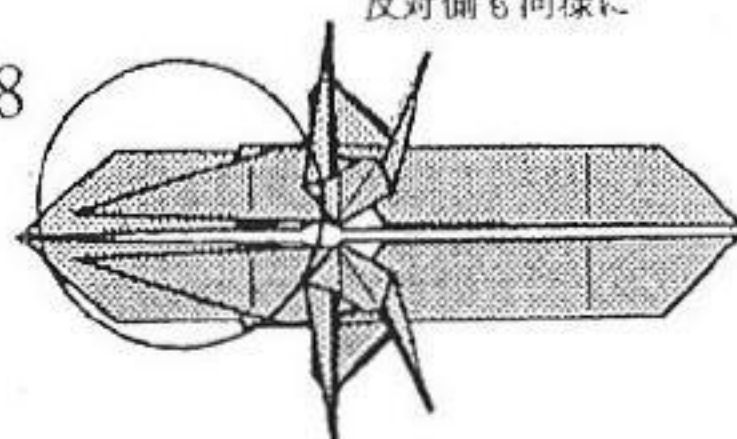


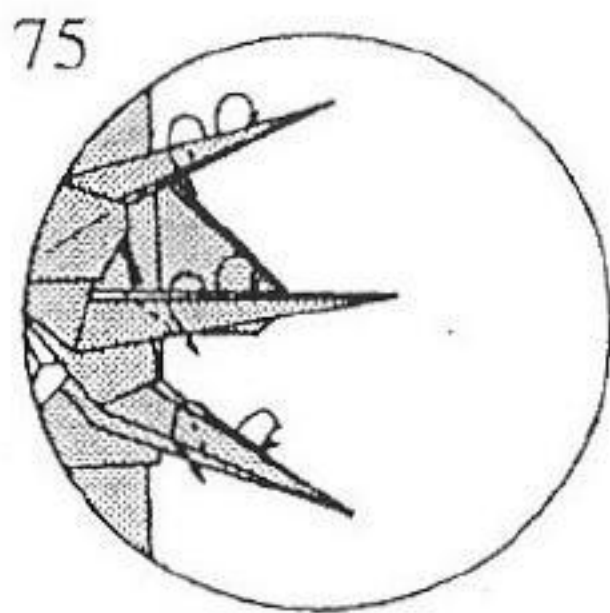
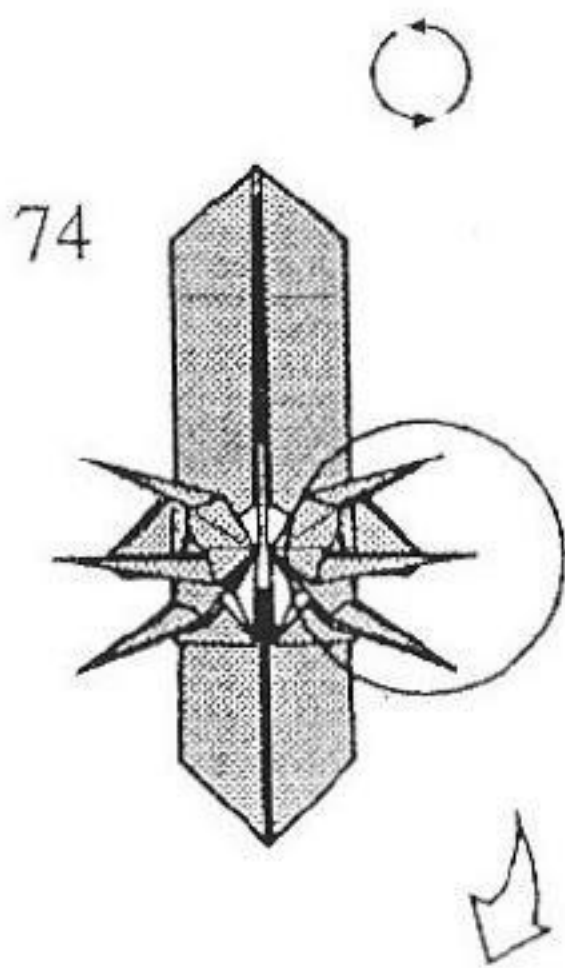
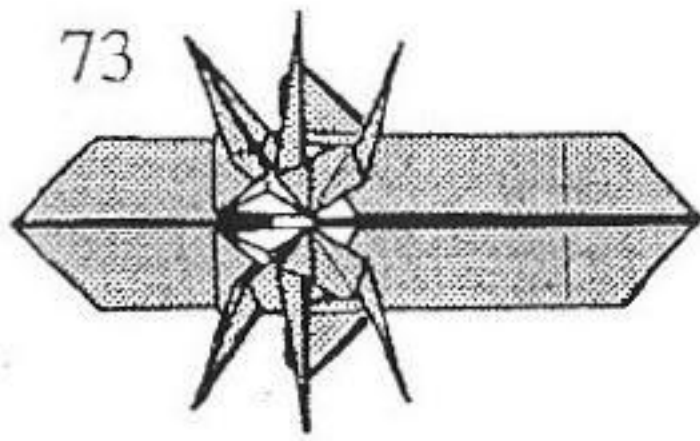
69



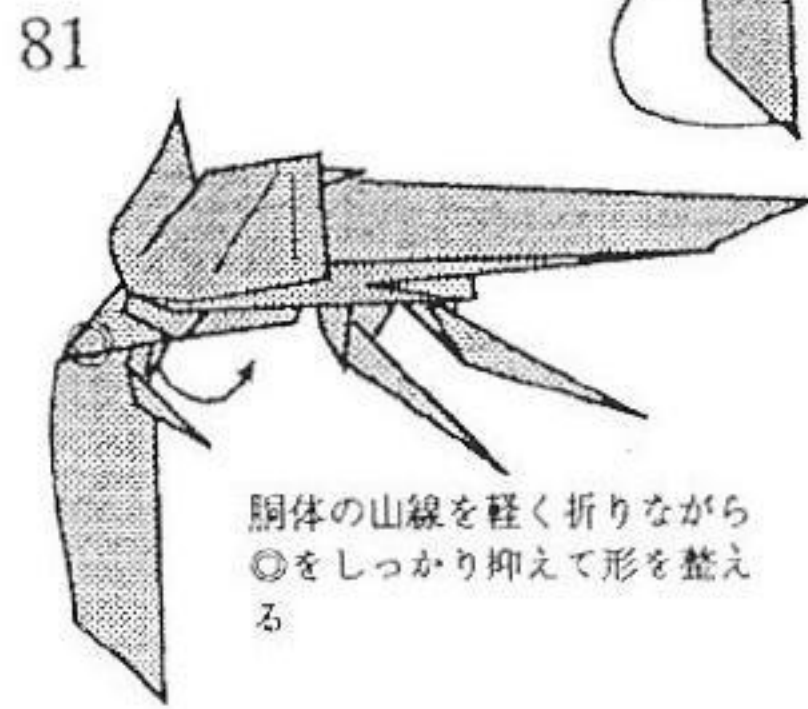
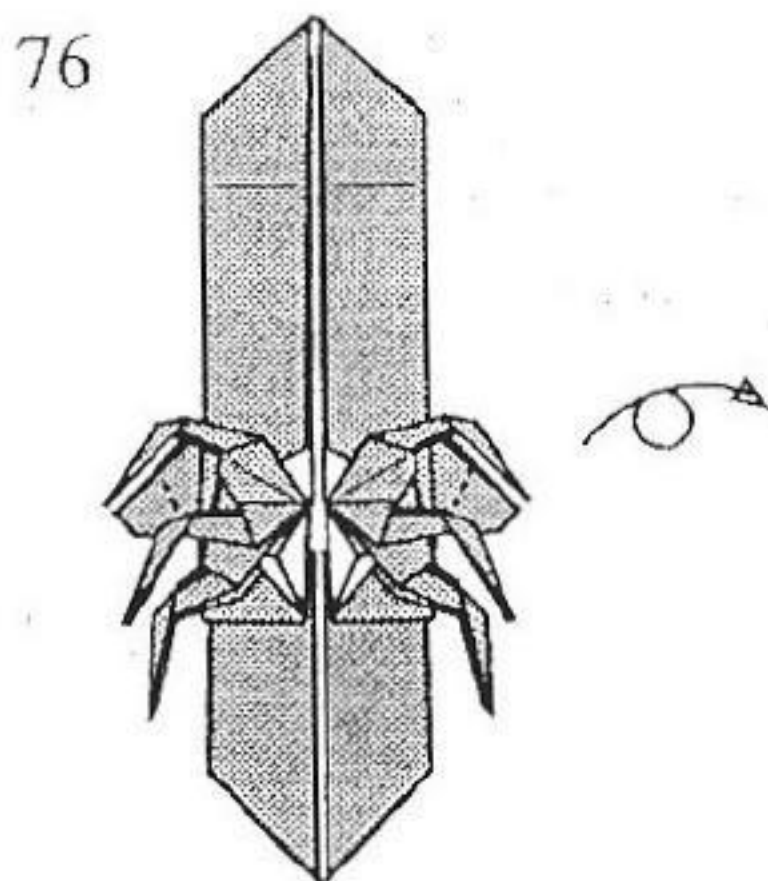
反対側も同様に

68

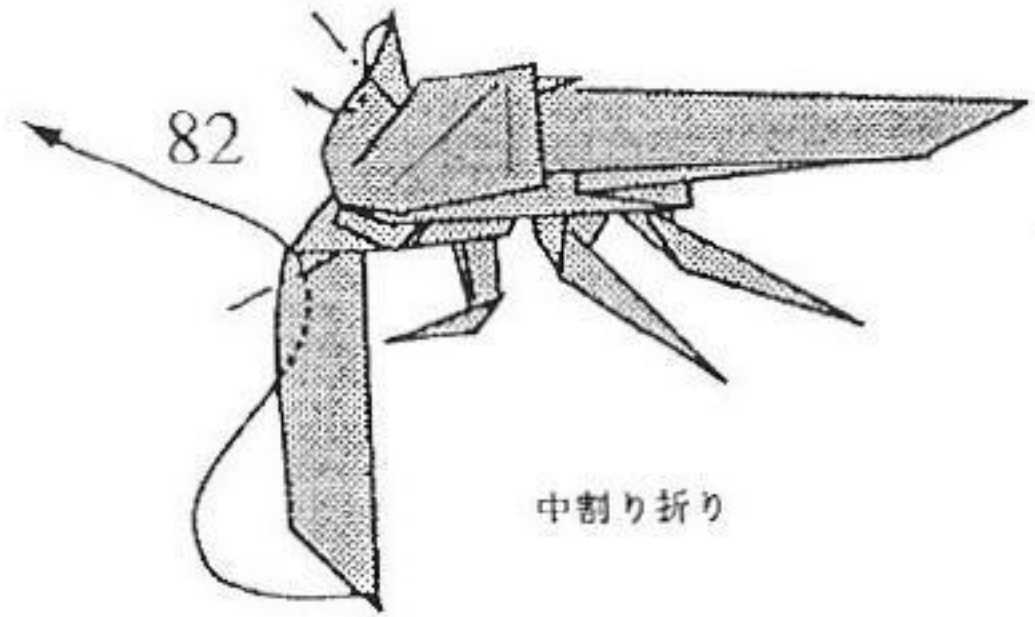
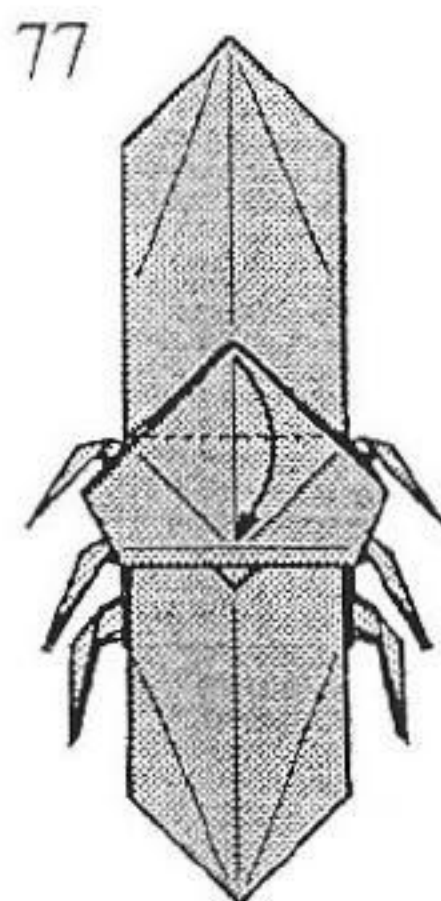
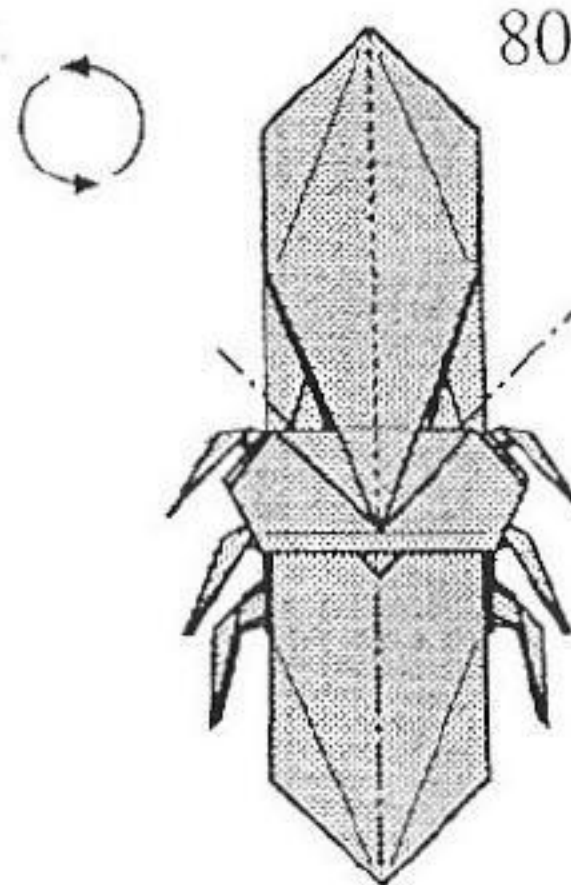




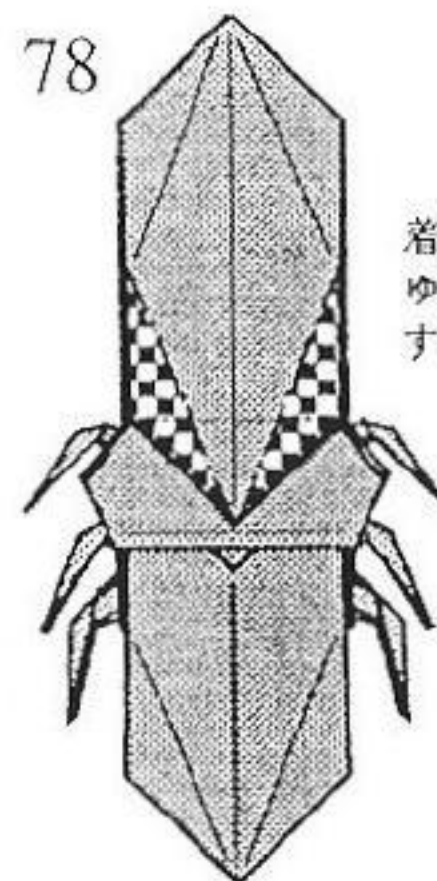
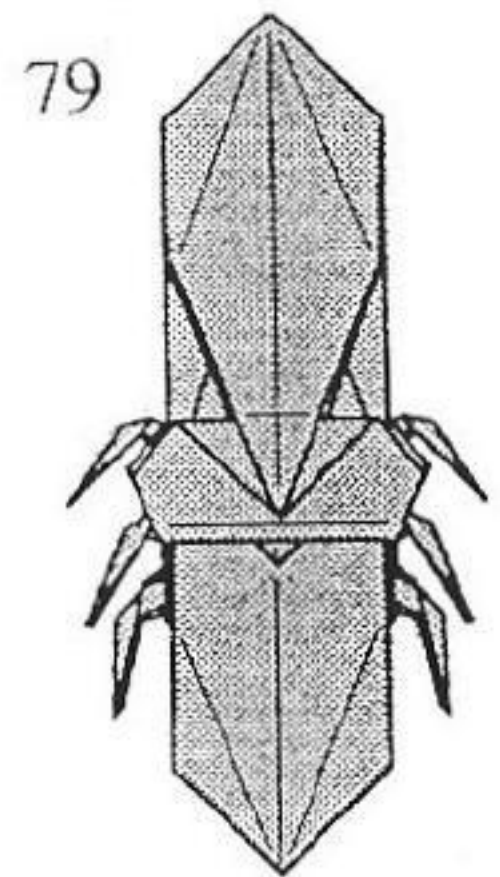
かぶせ折り



胴体の山線を軽く折りながら
○をしっかりと抑えて形を整え
る

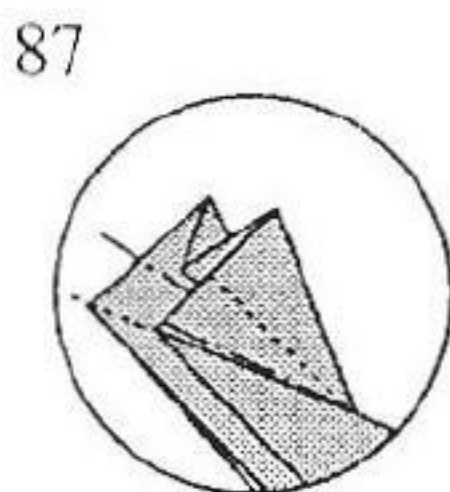
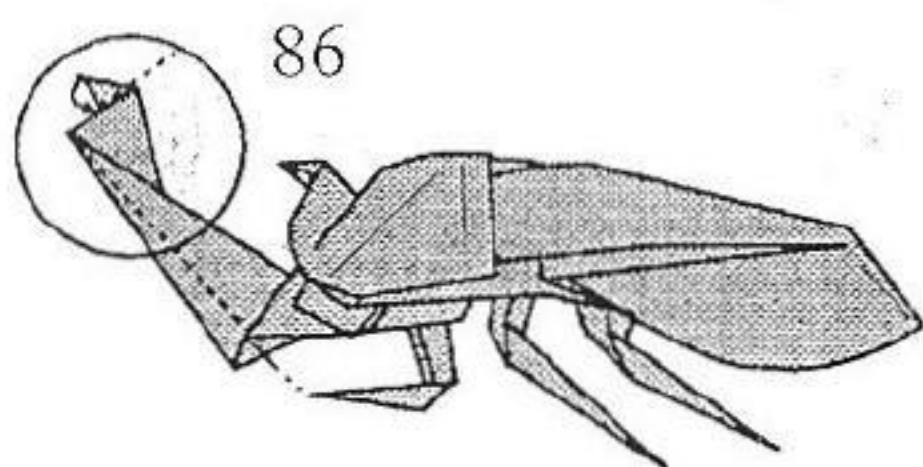
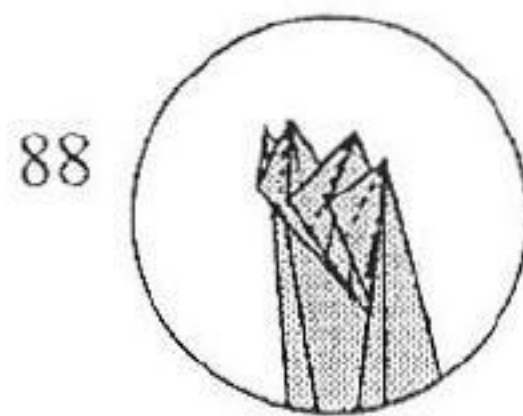
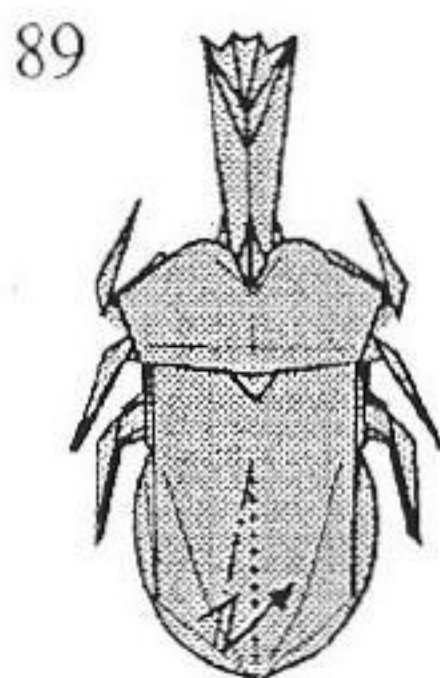
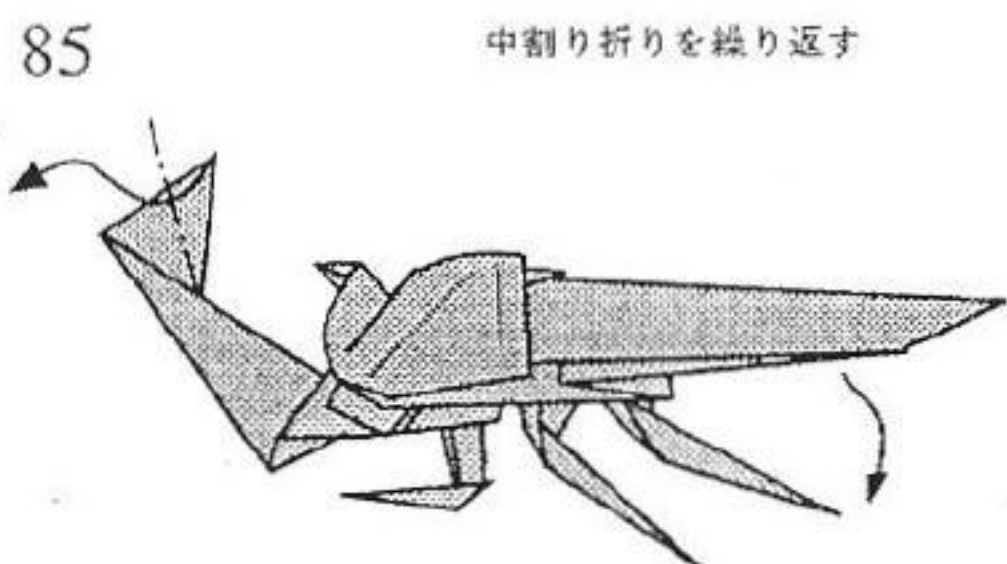
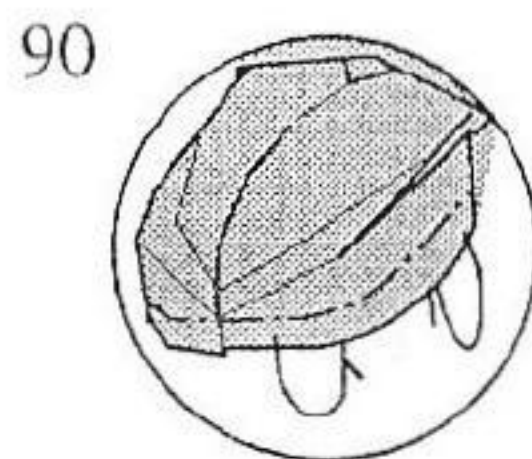
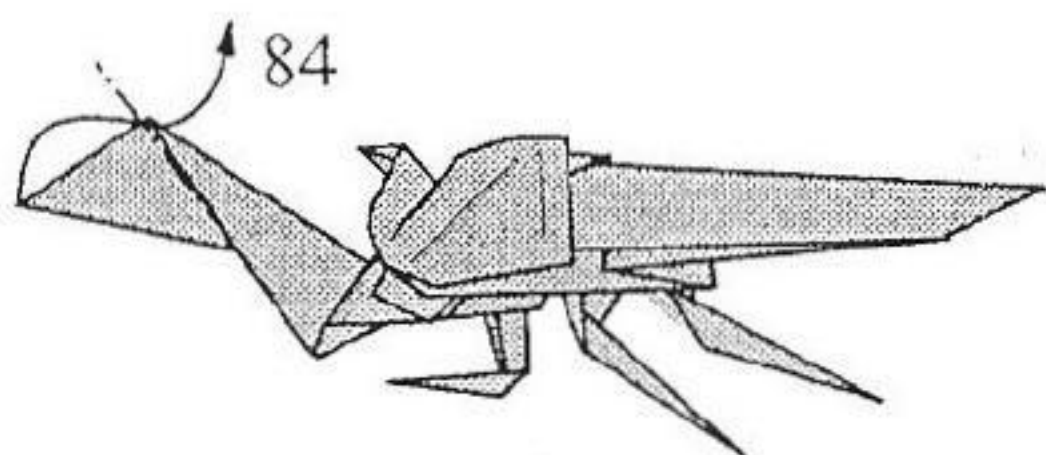
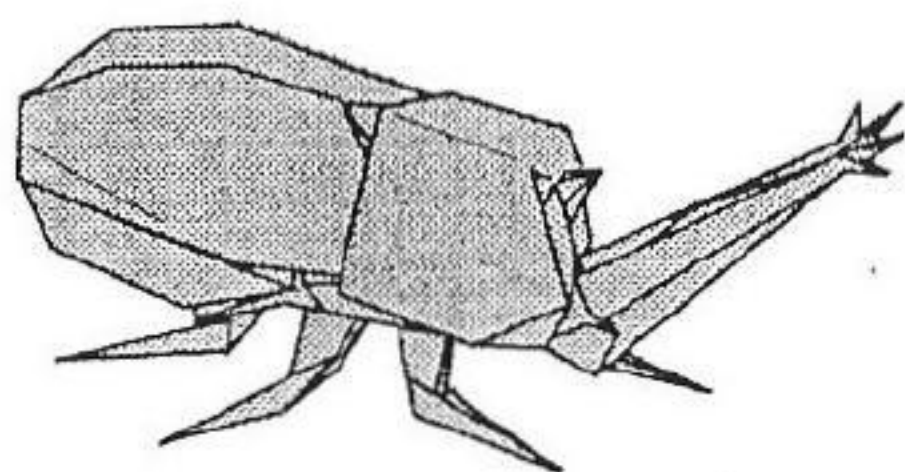
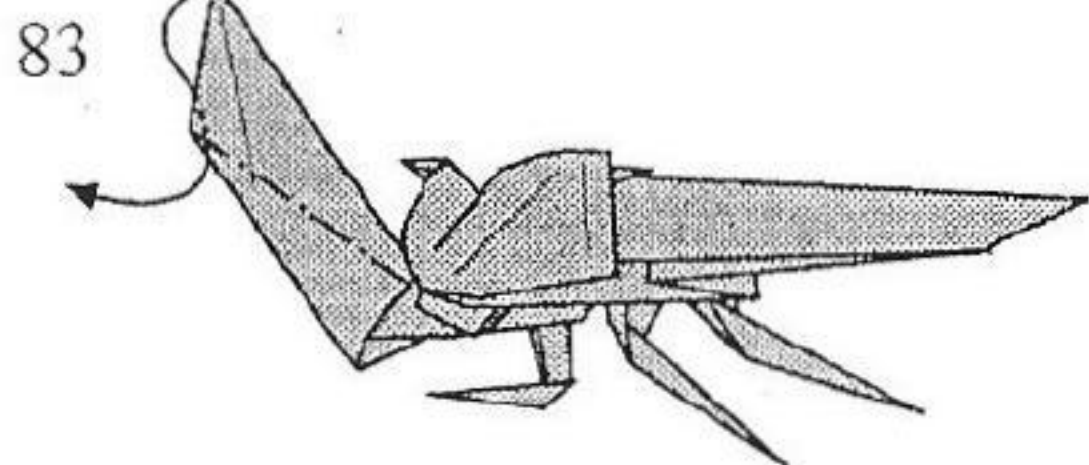


中割り折り

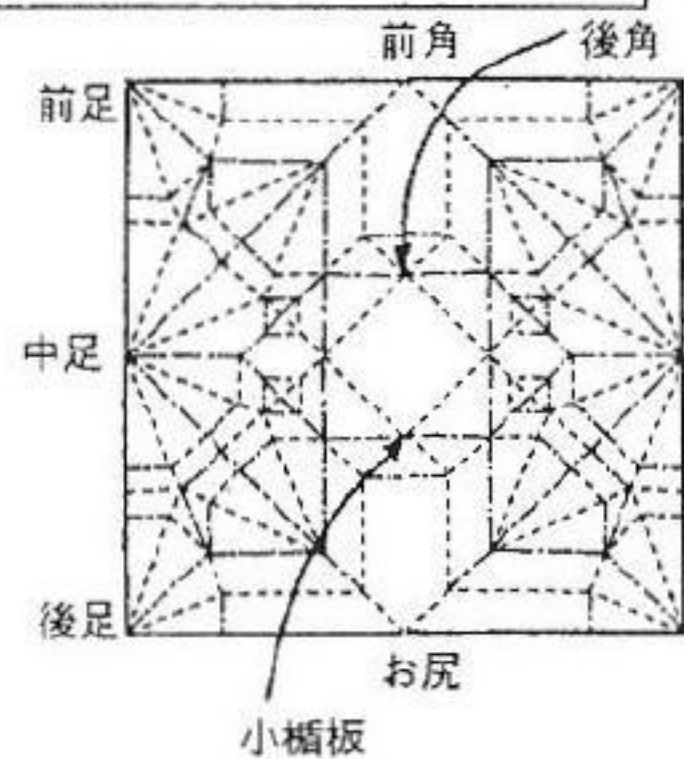


着色部分を沈め折り、いわ
ゆる open-sink というやつで
す

できあがり

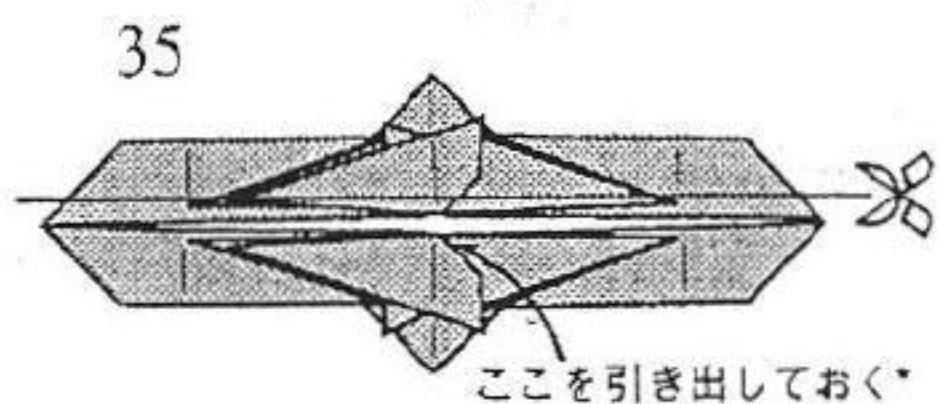
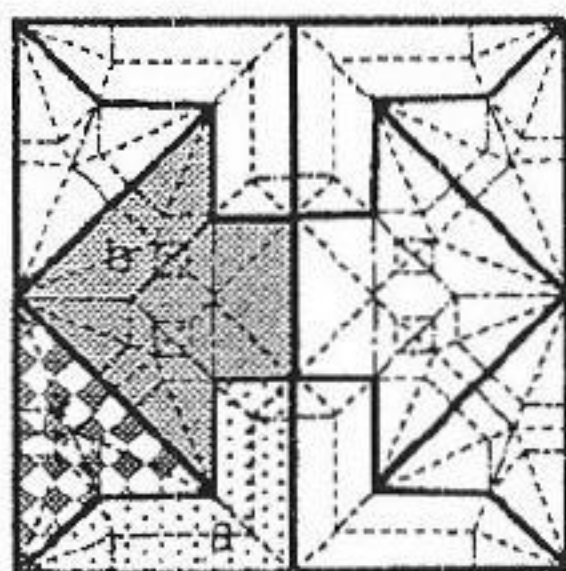


かぶとむしを展開図で考えて見よう



左の図は、図35（前号、実際は若干整理している*）の展開図です。それぞれの角の配置を示しました。図35を実線に沿ってはさみで切ってみてください。次の図の実線で示した3種類の同値の1値分子（目黒理論による）で構成されている（折上げたときに実線が同一直線上にくる）ことがわかります。aの分子がお尻を表現するパターンになっています。

まず角の配置をおおよそ決めて、分子aの埋め込みを試行錯誤で考えました。結果として面白い矢印分子（b）が生じることで奇麗に分子が埋め込まれました。ちょっとしたタイルのデザインにも使えそうです。



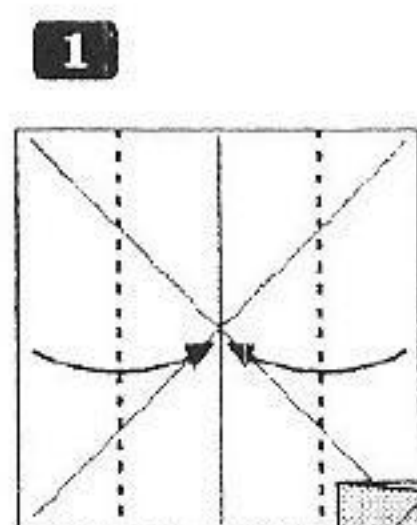
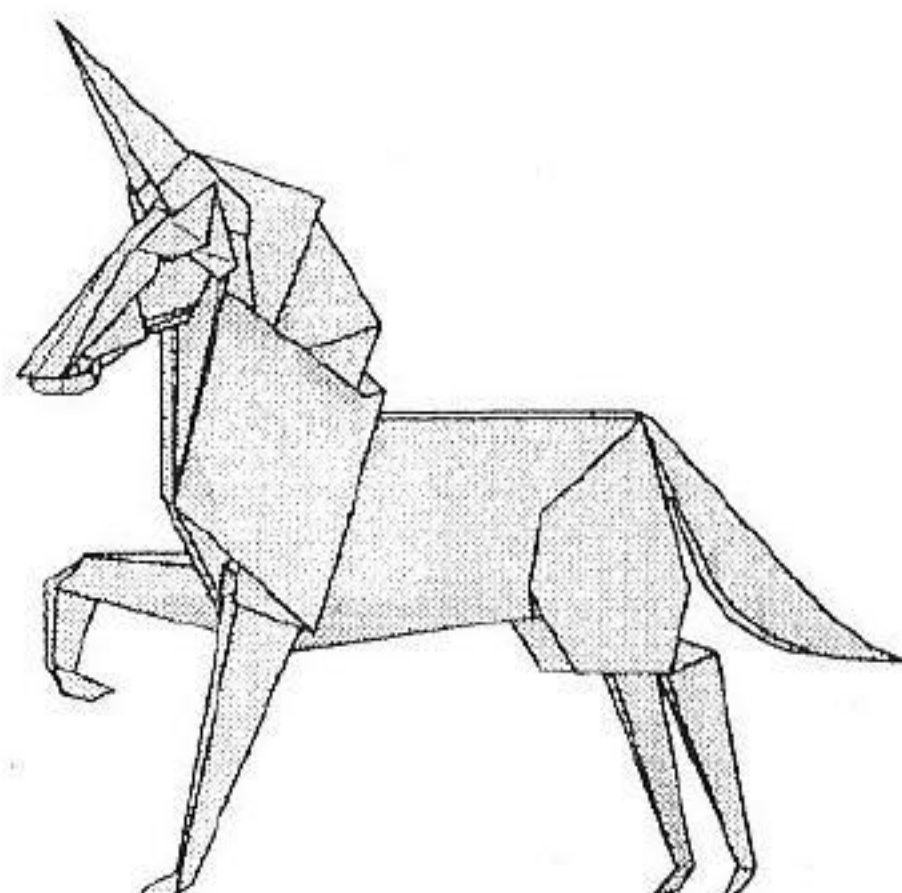
料理長のお褒め料理

[今日のメニュー]

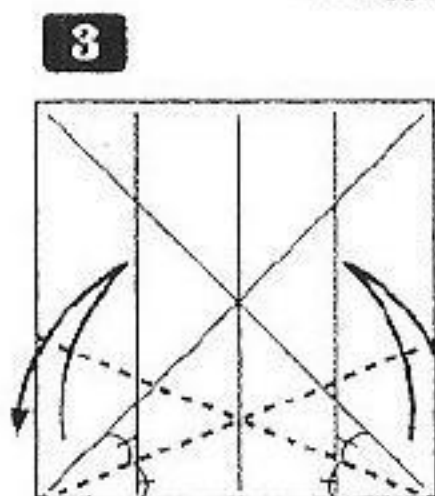
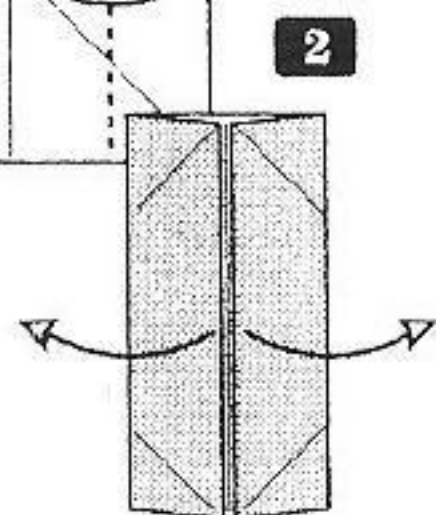
ユニコーン (前編)

川畑 文昭 作

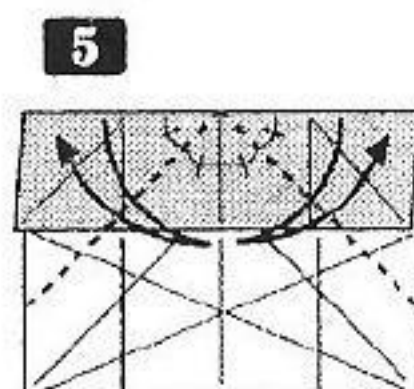
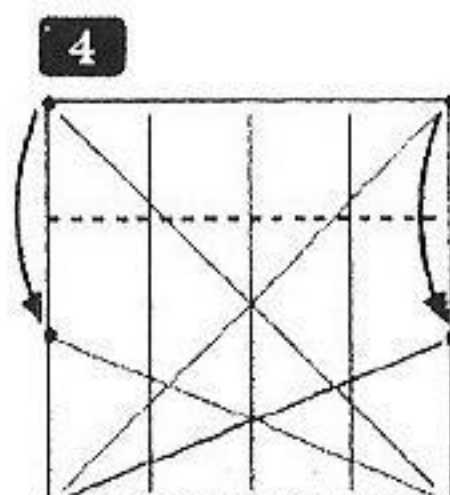
Unicorn by Fumiaki Kawahata



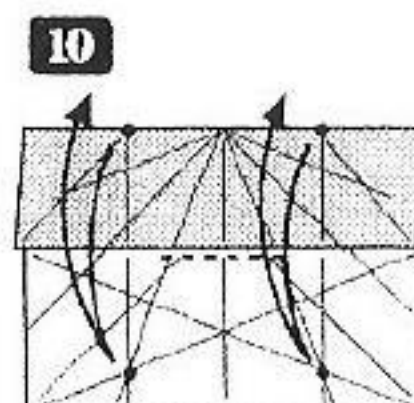
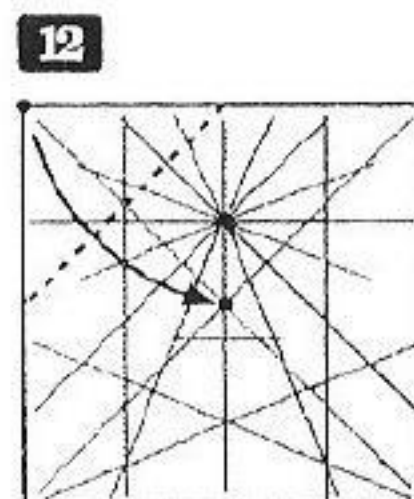
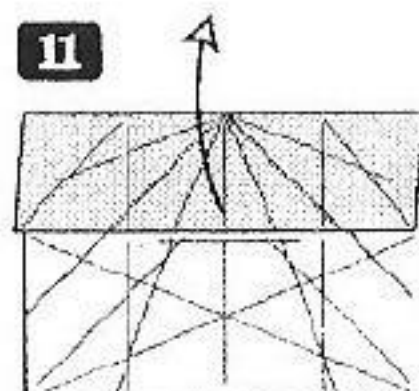
対角線と中心線を
折った後、中心に
合わせます



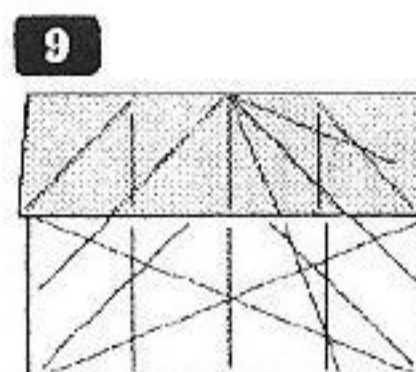
折り目を付ける



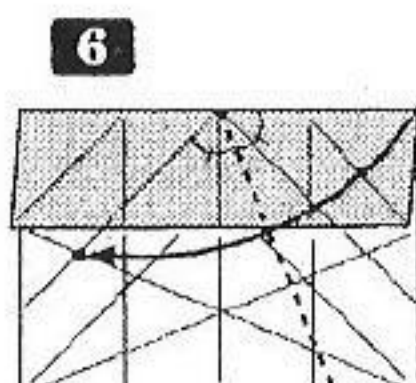
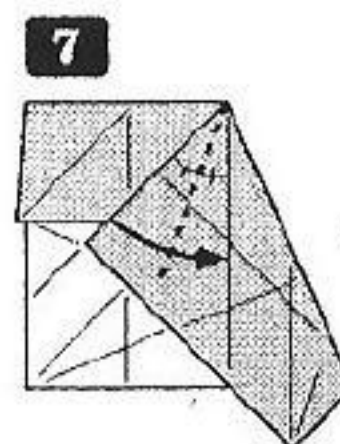
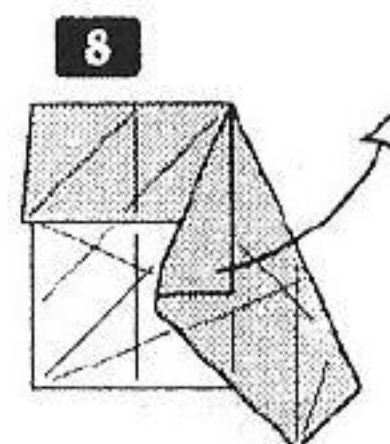
折り目を付ける

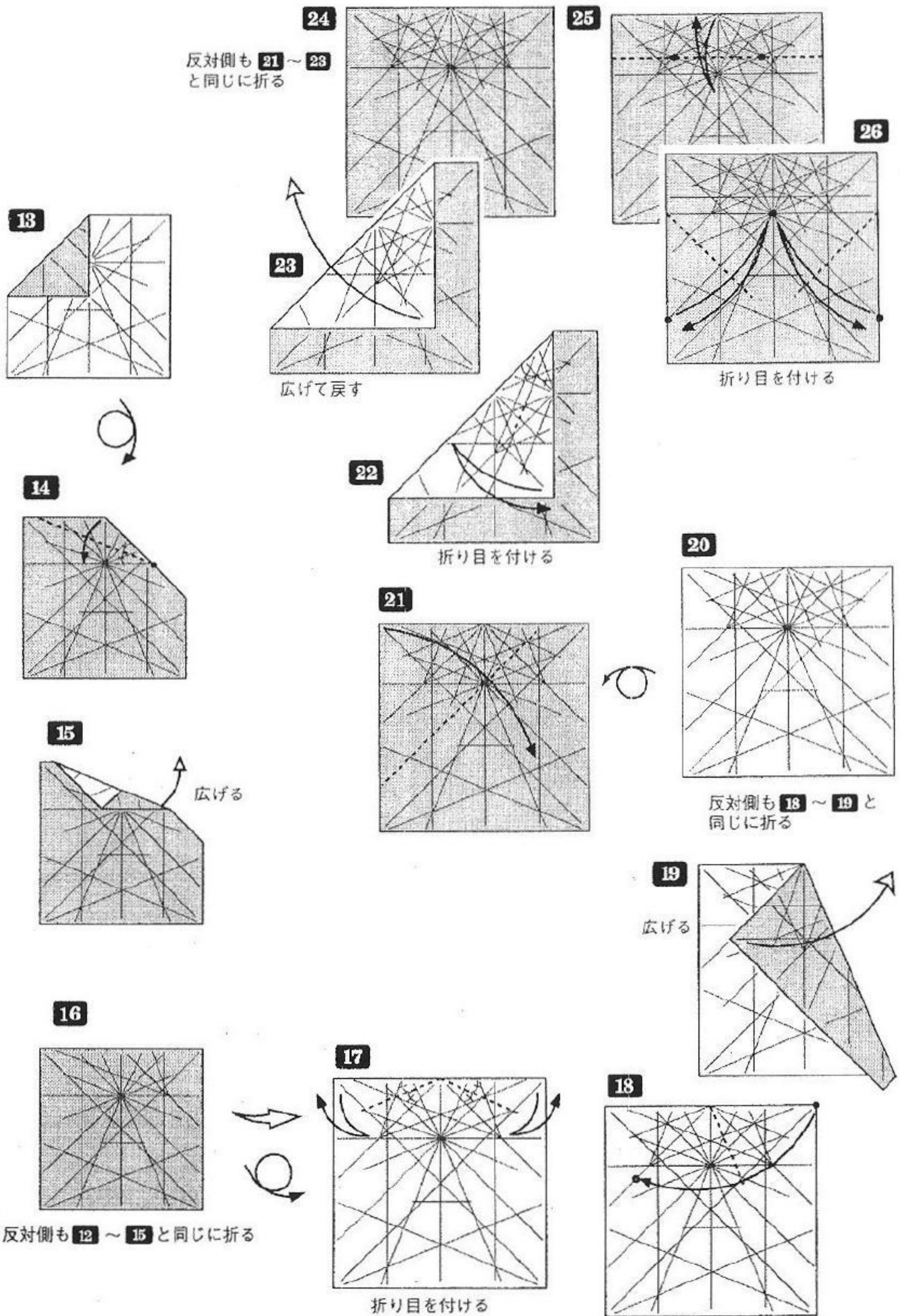


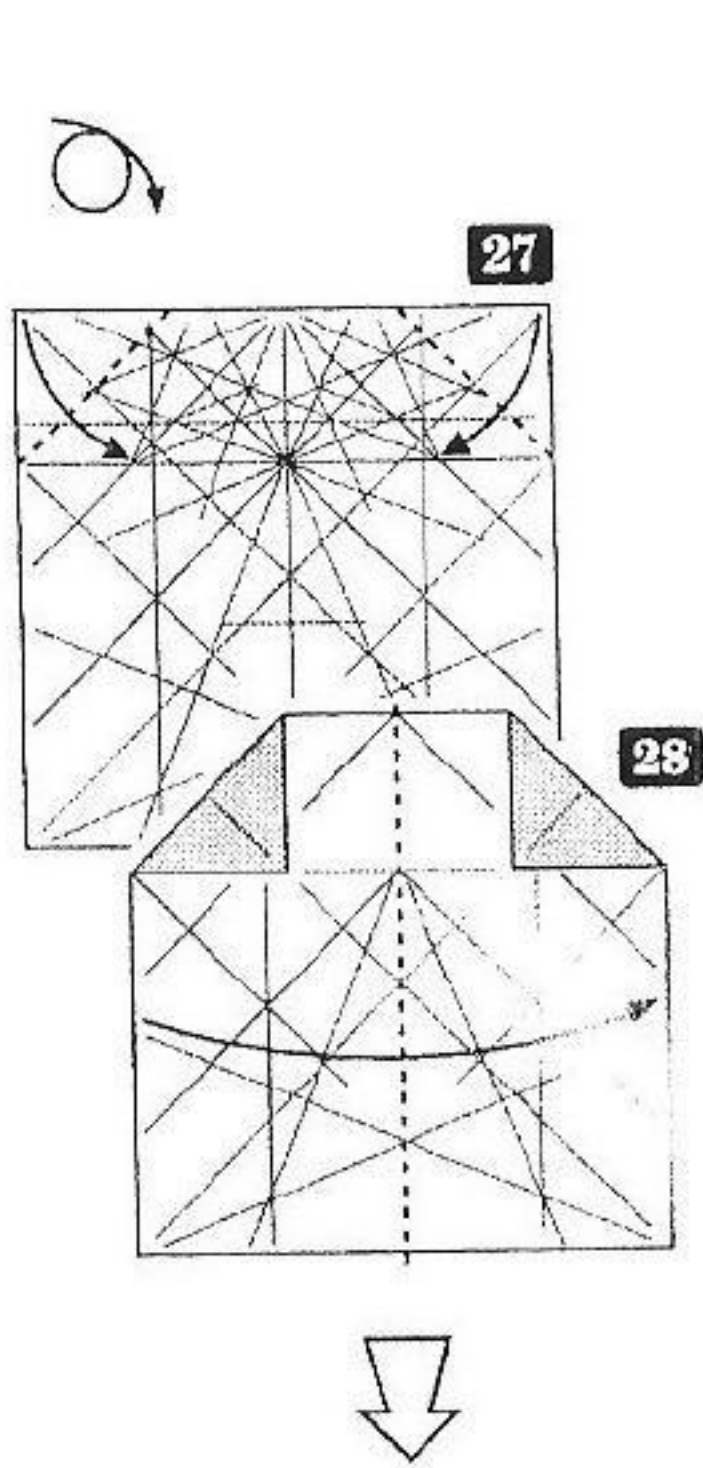
折り目を付ける



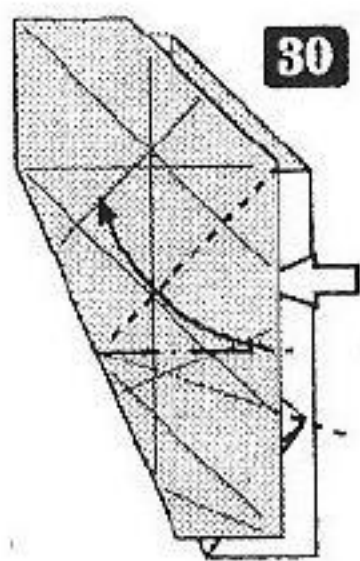
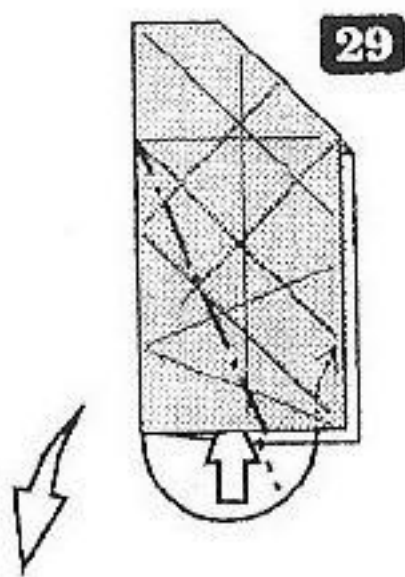
反対側も 6 ~ 8 と同じ



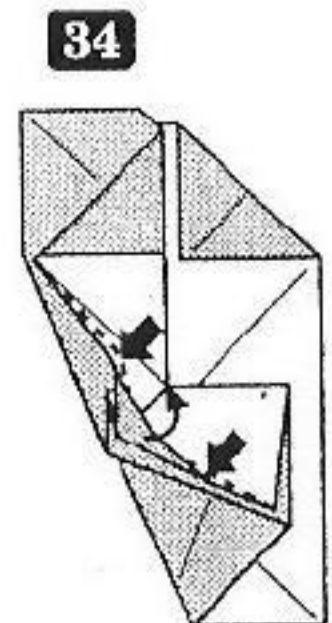
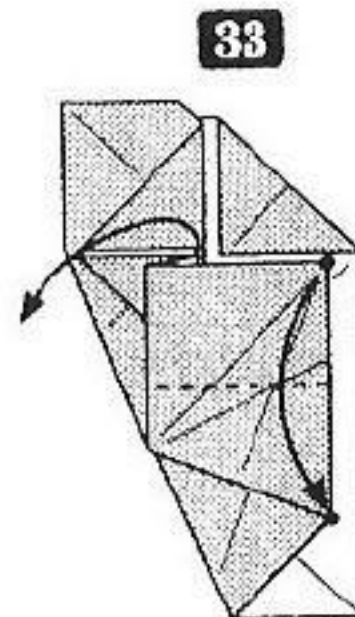
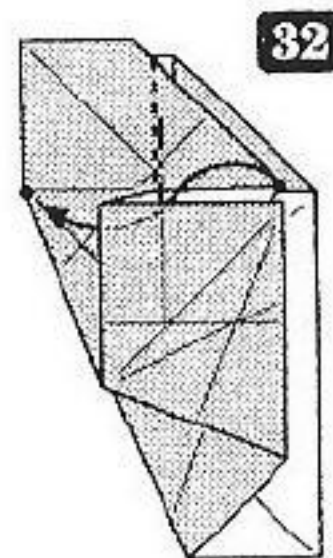
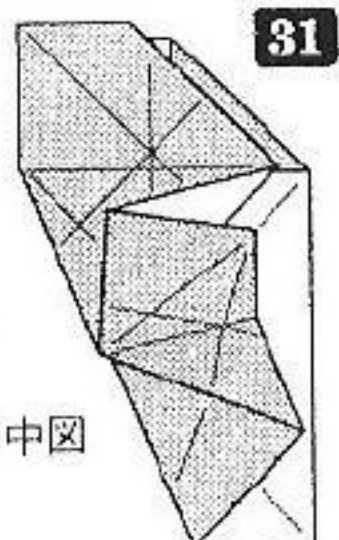




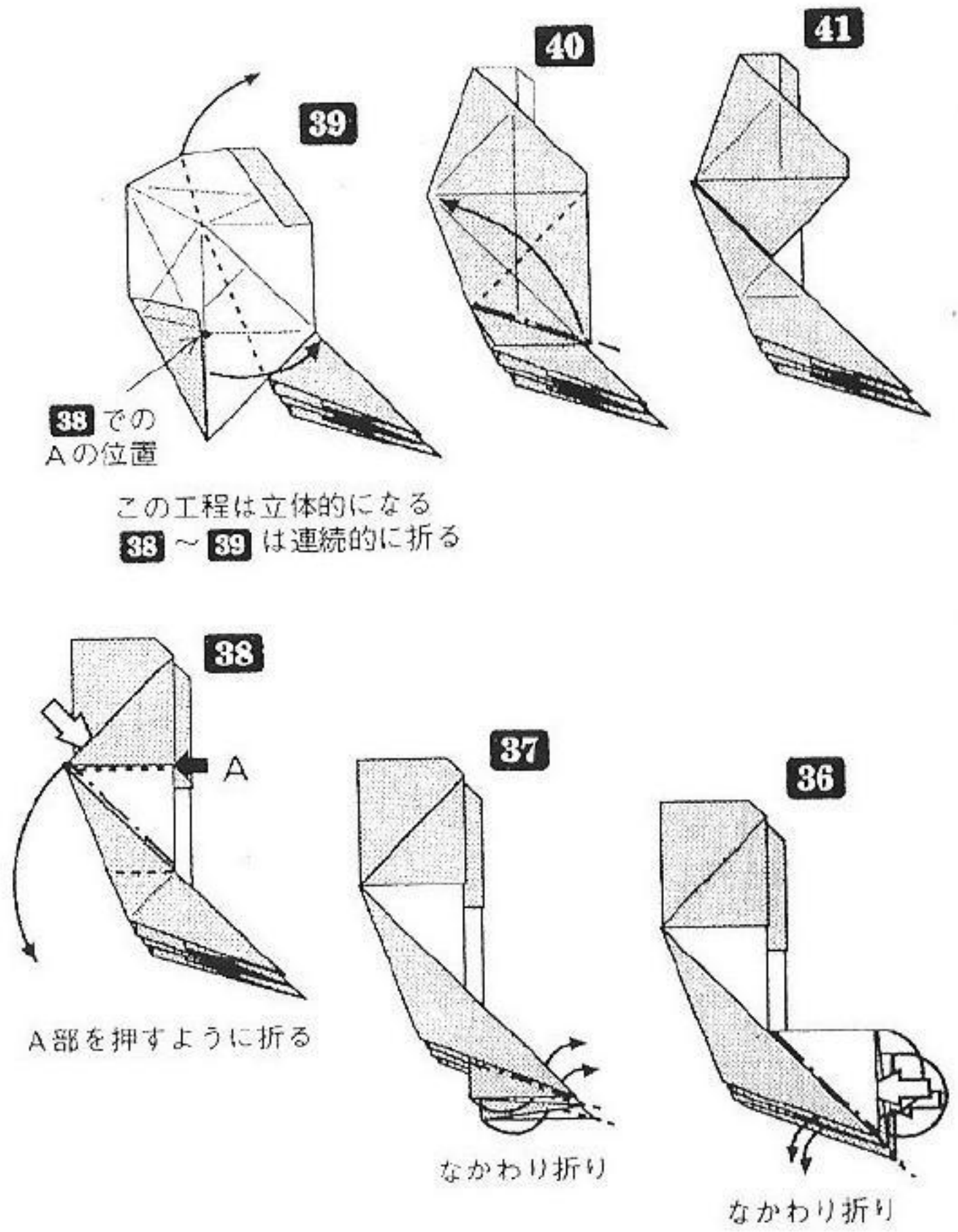
ここからは必要な線以外は省略します



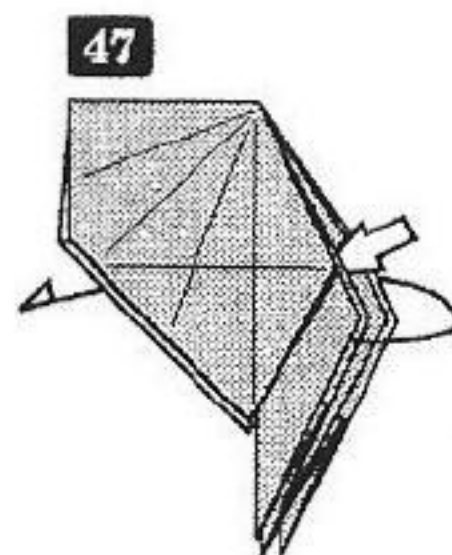
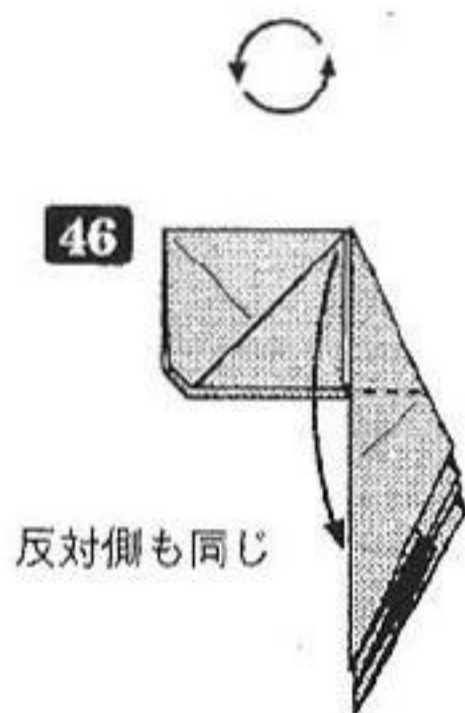
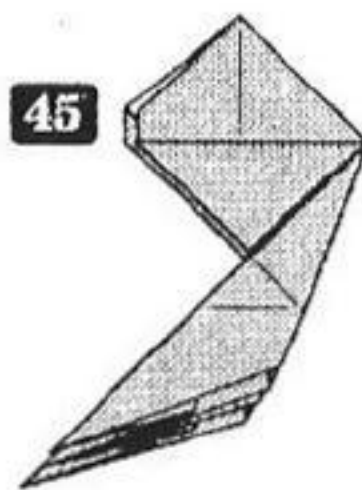
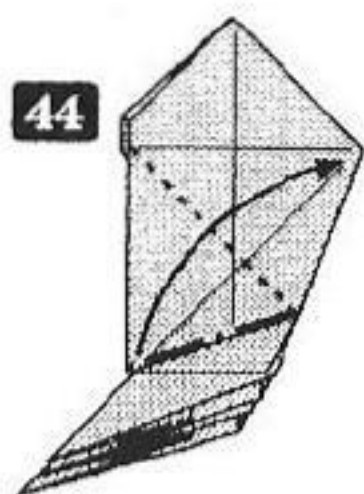
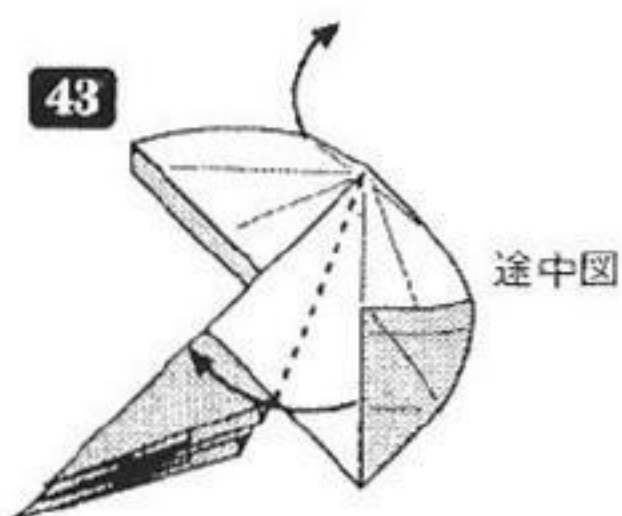
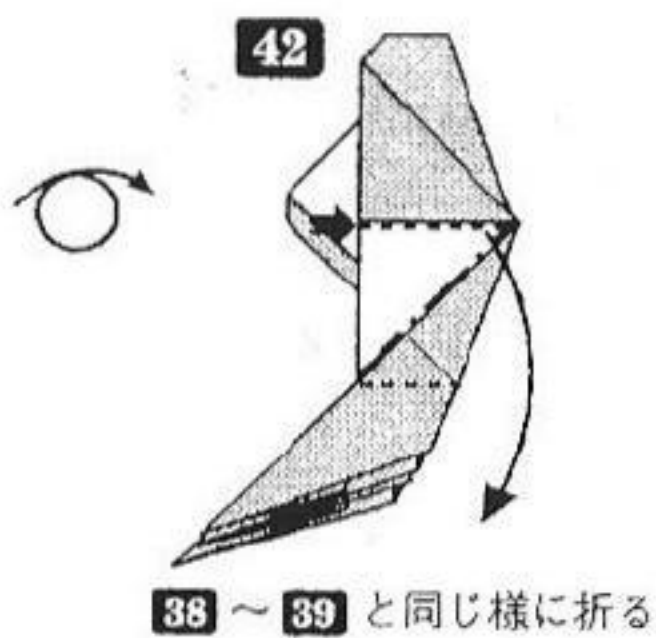
途中図



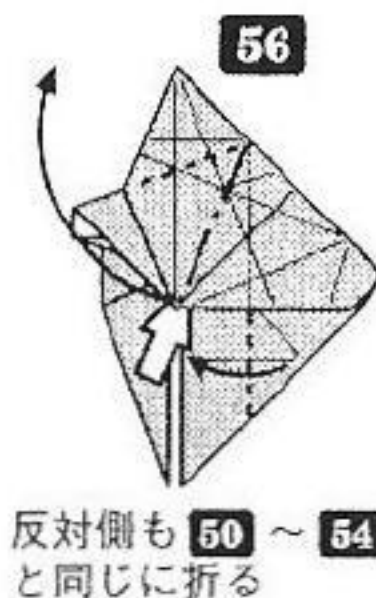
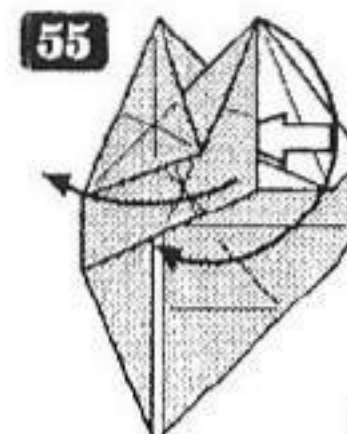
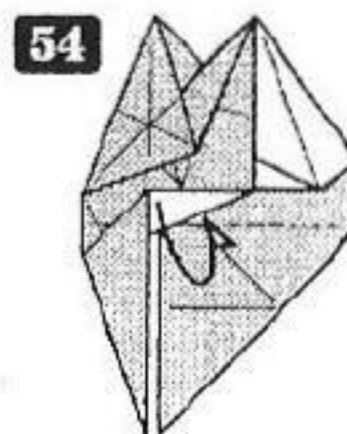
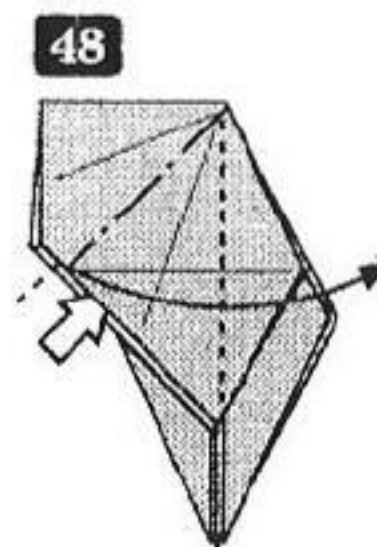
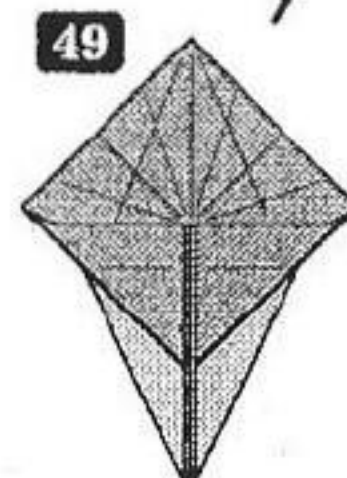
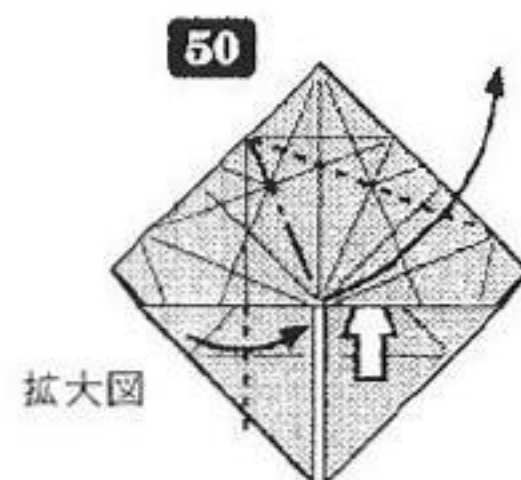
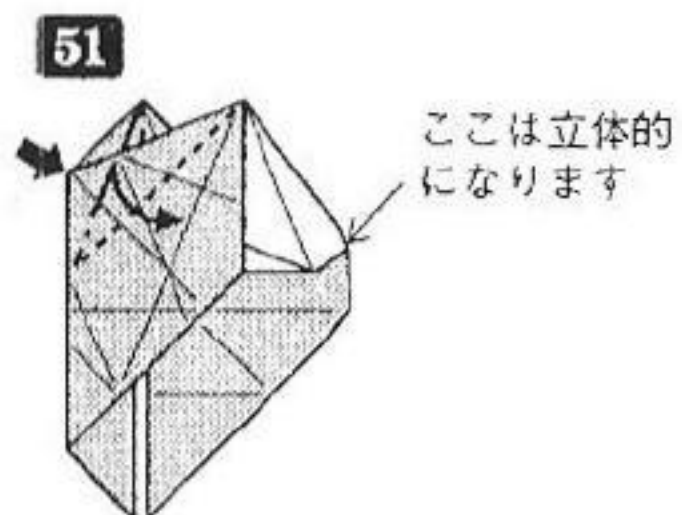
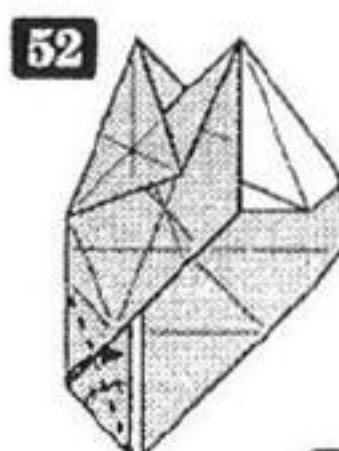
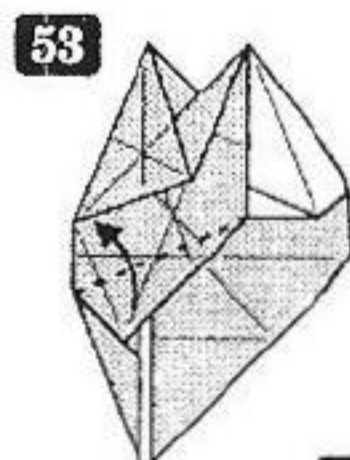
途中図

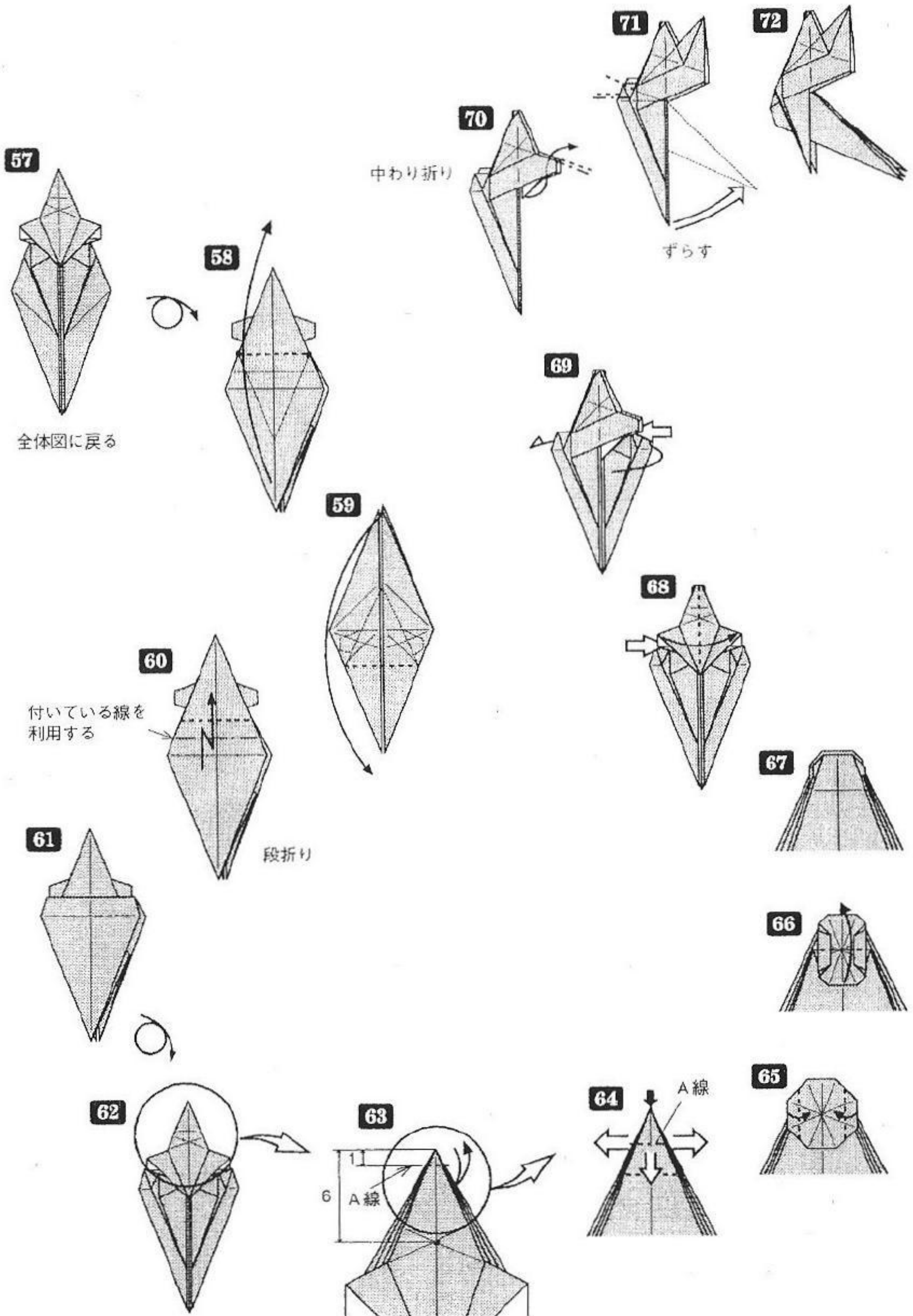


反対側も 30 ~ 35 と同じに折る

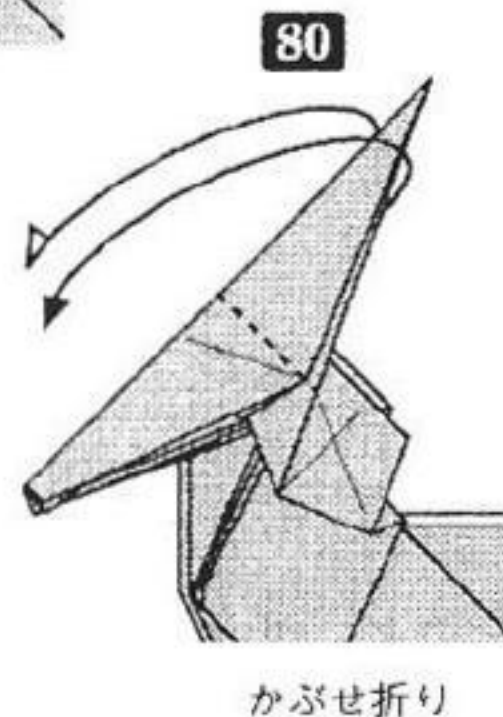
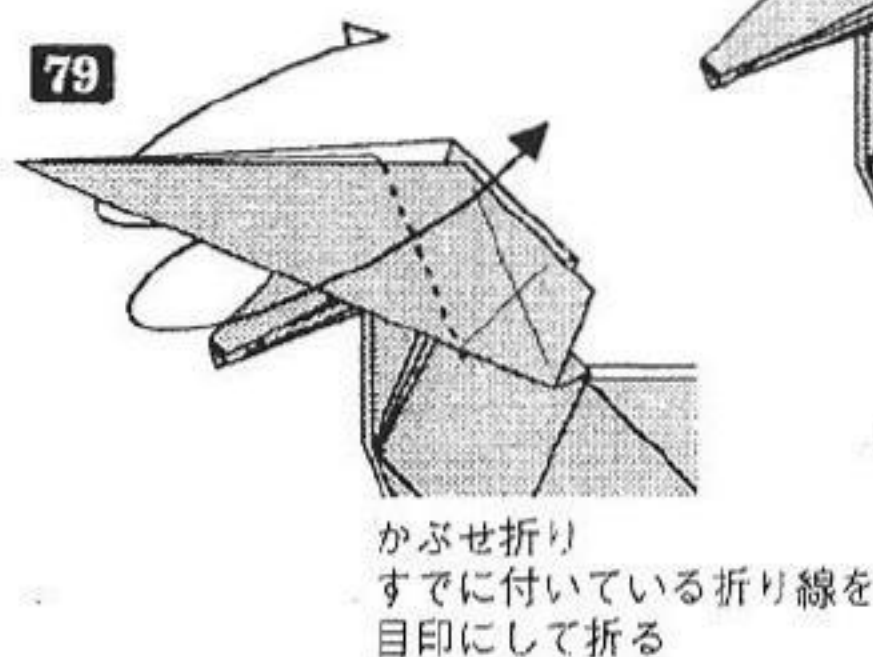
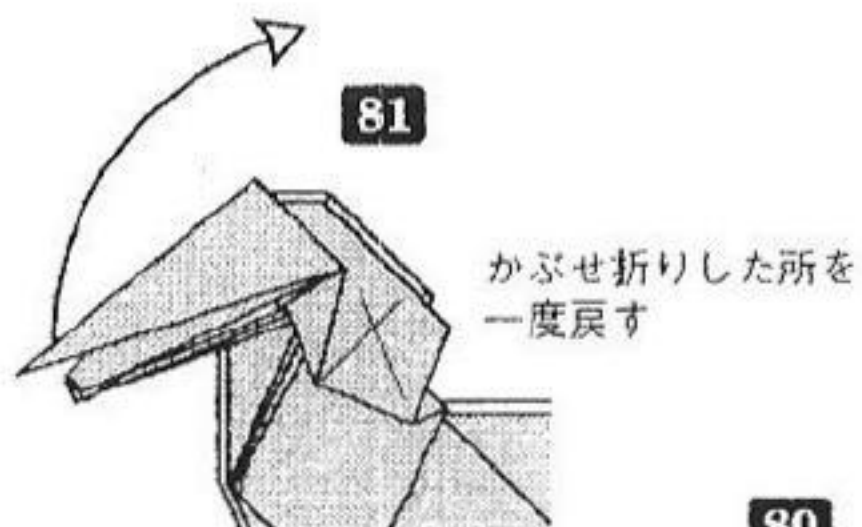
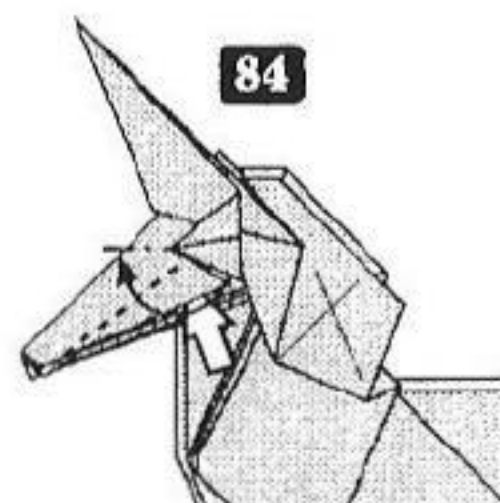
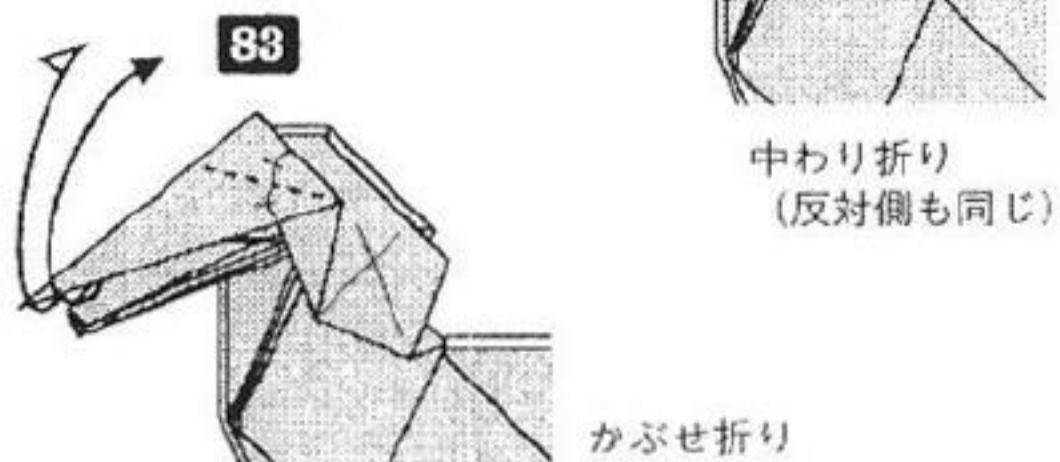
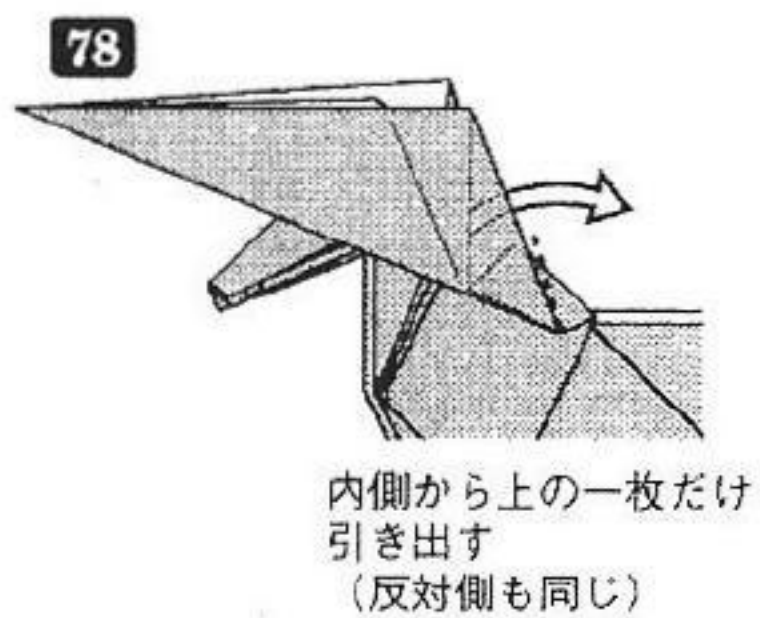
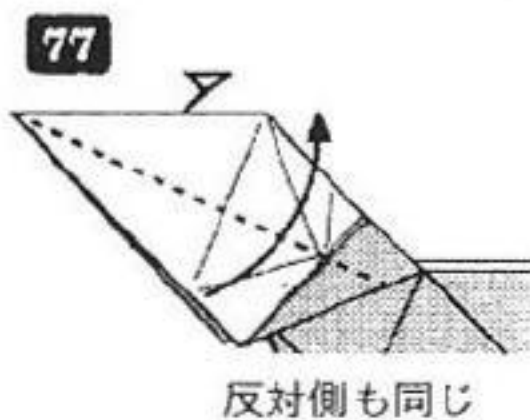
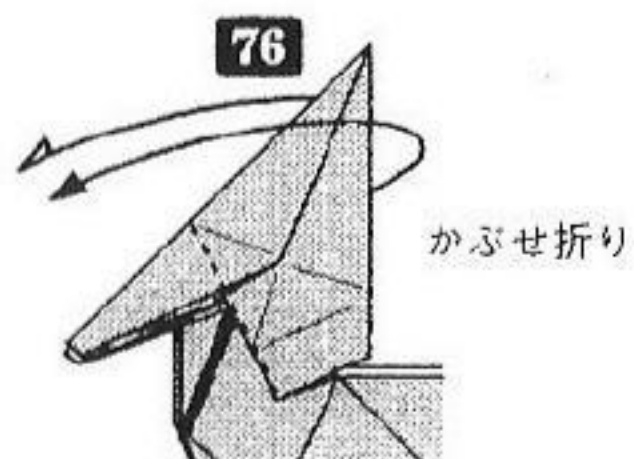
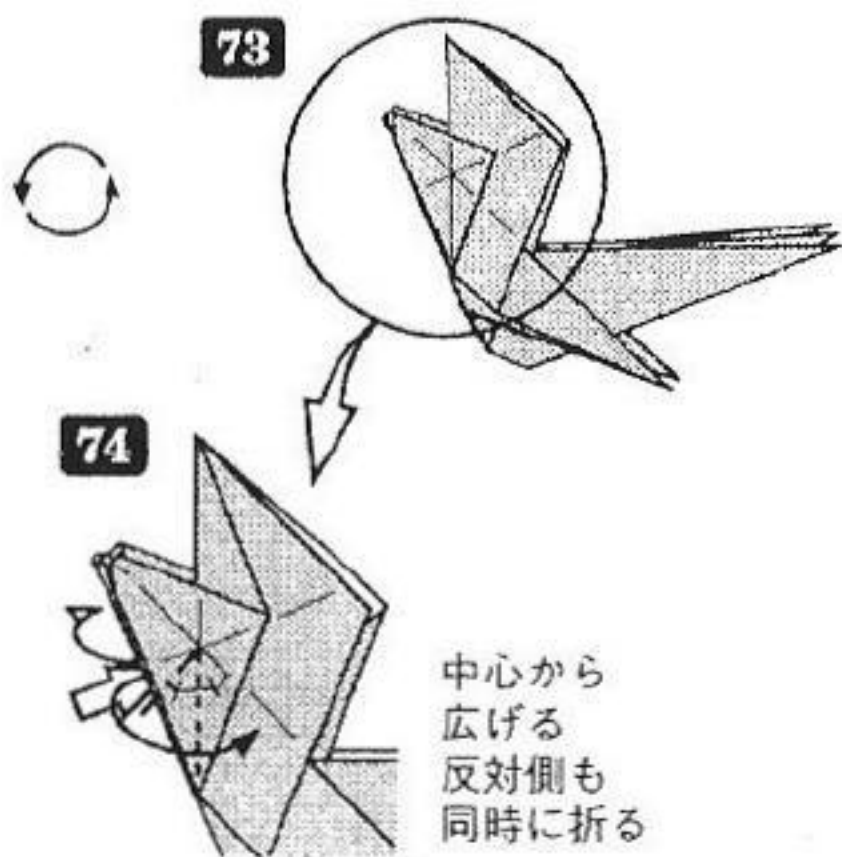


半分を反対側に折り返す





つづく...



西の国の都心に 巨大マンタ出現!

7月23日から8月15日まで、大阪心斎橋のソニータワービル一階のエントランスホールで折り紙の展示がされている。

ポリネシアの海底20メートルをイメージして構成されたディスプレイは一瞬驚きを感じる。それは、展示自体がこれまでとは感覚的な違いがあるからだろう。まず天井から吊り下げられた全長3.7メートル、左右3.4メートルの実物大のマンタが浮遊し、その脇にこれまた実物大のバラクーダ45匹が群遊する様子はまさに南海の海といった感がある。巨大マンタは4.5メートル四方の紙で折られていて、群遊するバラクーダはプリズムカラーという折り紙の大判を使って折られていて、プリズムカラーの特徴である微妙な光の屈折で迫力を出していて、見る者を飽きさせない。さらに、フロアーを海底に見たてて砂を敷詰め、珊瑚、うに、ヒトデ、カブトガニ、ホネガイなどがある。足

下に海底を、そこから見上げる巨大マンタとバラクーダの群れはまさに折り紙つき。このマンタ（吉野一生・作）の制作にあたったのは折紙探偵団メンバーの吉野一生氏と山口真氏の二人。あまりにも大きな作品となるため東京で制作し、送るという手段がとれず、現地制作となったとのこと。制作は2日間にわたった。これまでも大きい



マンタを背景に立つ作者



紙で折ることは何度となく経験している山口氏は「吉野モデルの特徴がよく現われた作品だった。それだけに大きな紙で折るのは大変だ。」と折紙格闘技を終えてホットしているようだった。また、吉野氏自身は「大きな紙で折るときの折り手順をもっと研究しておくべきだった」と語っていた。

オープン当日にはソニータワービル前で、先着500名におりがみはうす特製の恐竜用折り紙セットが配布され、道行く人を喜ばせていた。

折紙作家殺人事件



TVドラマ

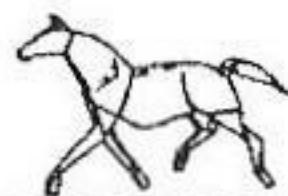
若手折紙作家が主役のTVドラマが放映される。(フジTV系、10月放映予定 関西テレビ制作 大沢樹生主演 黒のサスペンス 日時未定) 高橋克彦原作の「紙の蜻蛉(とんぼ)」という短編小説がドラマ化されるもので、「かやら草」の蜻蛉が登場するあたりさすが歴史推理に詳しい高橋克彦氏の作品と思われる。内容は、生い立ちにいろいろあり、すこし歪んだところのある新進折紙作家をとりまくご婦人との間で起こす殺人事件。面白いところは8才の子が、「かやら草」の蜻蛉を折るところ。当然8才の女の子がかやら草の蜻蛉なんて思えないところ。実はこれ、江戸時代の男の人形師が転生していたのだった。原作と

は大分違って脚色されている。また、折り紙が出てきても、子供向きではない作品である。

このTVドラマ制作にあたって、おりがみはうすの方に折紙指導の依頼があり、岡村昌夫氏が多忙な時間をさいてこれにあたった。しかし、撮影当日は岡村氏が中国に行っているため、おりがみはうすの山口真氏が出向いた。「たとえTVドラマの中とはいえ、折紙作家というものが取り上げられるということに面白さがある」といっていたが、「折り紙の扱いや登場はいいけどイメージ的には余りいいとはいえないかも知れないね」とも言っていた。

そして、主人公の折紙作家が作った個展会場に展示される折り紙作品の

ほとんどが、折紙探偵団のメンバーである山田勝久氏のもの。(偶然にも、山田勝久氏は8月19日～9月19日までおりがみはうすで個展を開くことになっている) ドラマの中では主人公の個展のパンフレット、ポスターなどが本当に印刷されて制作されていたのには驚かされた。(それにしてもギャラが、、、)しかし、映像として映しだされるところはそれなりにいいのだが、見えない部分ではかなり乱暴で、こういうところに作品を貸し出すときには、相当の覚悟がいるもんだと思い知らされた。折り紙に対しての思い入れが違うのだからと、一言でかたづけられない扱いを受けるシーンもたびたび目撃すると、貸し出した当方としては心が痛んだが仕方がないのだろうか。それでもまた依頼があるとやってしまおうのだろうか。ただでいい映像に(勿論折り紙だけでいいが)なってくれたらと思う。



デビット・ブリル氏来日歓迎パーティー

7月25日の夕刻に、文京区春日にある区民センターでイギリスを代表する折紙作家であるデビット・ブリル、デビット・ペティー両氏の来日を歓迎するパーティーが開かれた。会場には折紙作家の高浜利恵氏、笠原邦彦氏、日本折紙協会の大橋皓也氏、真下治隆氏ら「をる」編集長の石川光則氏を含め50名近くの折紙ファンが集まり、予定の3時間があっという間に過ぎてしまうと感ずるほどの大盛会であった。

パーティーは、午後5時45分にブリル氏の挨拶で始まった。会の運営にあたった探偵団メンバーにとってブリル氏は、最も来日を待ち望んでいた人物の一人である。それは、笠原氏や吉沢氏、河合氏といった方々の著作によって創作折紙を志始めた我々にとって、世界に目を向ける最初のきっかけを与えた一冊の本による。「世界の折紙傑作選」に掲載されたブリル氏の「馬上のハンター」は、当時日本で折紙公開された中で最も斬新かつ複雑な作品であったろう。その本の編者である高浜利恵氏に歓迎の挨拶をお願いした。

折紙はフォームです

パーティーは立食形式で行われ、各テーブルでは人を代え品を代え様々な折紙談義で盛り上がっていた。

頃合を見て、折紙プログラム「ORIOver1.0」を完成させて今乗っている目黒俊幸氏の作品紹介、ブリル、ペティー両氏への記念品の贈呈と進み、山口真氏による出席者全員の紹介（山口氏の紹介は笠原氏が担当した。これがなかなか可笑しかった。）が終わると、いよいよゲストの作品披露が始まった。

初めにペティー氏、ペティー氏の作品は単純な線で構成された顔やユニットなどで、非常に意識されたものだと感じられた。頭髪の寂しいお面は、わざとブリル氏の目に触れないように配慮するなど和やかな雰囲気で行われた。最後に鉢付きのサボテン（「おりがみ新世界」に「松ぼっくり」としても紹介されているものに近いイメージ）を仕上げたもの

のを披露された。氏自身のお気に入りのように戴いた名刺にもプリントしてあったものだ。

続いてブリル氏、氏は永くイギリス折紙協会（BOS）の中心にいた。今は、待ちに待った作品集の出版にむけて全力を傾けているらしい。

初めに取り出したのは折紙パスポートである。これは、数人のグループの共同制作とのことであった。パスポートのページをめくったときに現われた不思議な「回転体」（茶谷正洋氏風のペーパー・アート；おりがみ新世紀に紹介されている）が、まず目を引いた。続いて大きな鞆から飛び出してきたのは、例の「馬上のハンター」であった。氏がこの作品を発表したとき注目されたのは、一枚で馬とそれに乗るハンターを表現するこの作品のアイデア・技術もさることながら、同時に発表された狐犬と追われるきつねとの見事に意識されたコンビネーションであったろう。

氏はかつて注目を浴びたハンターをかならずしも良しとしない。絵の先生でもあるブリル氏は、彼の恩師の言葉を引用しながら「ディテールにこだわってはいけけない。全体のフォームにこそ目を向けなければいけけない」と語った。それが

言葉だけでないことは、氏の作品を見ればわかる。純白の紙で折られた「馬」は、折り紙にありがちな突っ立った姿勢でなく、見事に躍動していた。

BOSでは「折り紙でいまだ成されていないこと」というチャレンジコーナーがあったという。この目標に次々にチャレンジして行くことが氏の作品のレパートリーの広さと質の高さの理由の一つと理解できた。

氏の今のチャレンジの対象は人物像だそうだ。彼は続けた「折り紙は折り紙だけでなく、もっと多くの他の芸術分野の恩恵を受けるべきだろう。」

雨もあがって

パーティーが終わると雨はあがっていた。今年の東京はいつになく雨がが多い。この日も朝からかなり強い雨が降っていた。大雨の中集まって頂いた方々も満足して帰ったことだろう。早くから料理の準備などに集まって頂いた「探偵団婦人部」の方々には本当に感謝したい。探偵団発足4年目にして、去年のロバート・ラング氏に続いて今年もまた歓迎会を開くことができた。「こんなパーティーなら毎年開きたい」「癖になりそう」そんなことを考えた。

（西川誠司）



写真は初対面のブリル氏と目黒氏

ARS+ (アルス・プラス) というのをご存じだろうか。「芸術と科学の接点をさぐろうとする人々が集うクラブ」なのだそうだ。メンバーがすごい。大学の教授、グラフィックデザイナー等々。科学と芸術といえは折り紙もなかなかのものだろう。そんなわけでメンバーの中に折り紙関係者も多いようだ。伏見康治氏、三浦公亮氏、笠原邦彦氏、布施智子氏らが名を連ねている。

このクラブの月に一度の定例会では各分野の方による講演会が開かれている。さる7月23日に開かれた定例会で前川淳・目黒俊幸両氏が、折り紙の数理的背景を切り口に講演した。

「数理折紙序説」

講演は千駄ヶ谷にある津田ホールの会議室で行われた。20名ほどの出席者の前で初めに前川氏の話が始まった。

「数理折紙序説」と題した講演は折り紙と数学の関係を5つのカテゴリーにわけ実例を交えて、折り紙の

数理世界を大きく概観するダイナミックなものだ。(今号の巻頭論文をご参照いただきたい)「ピバおりがみ」でマニアをあっと驚かせた「悪魔」の美しさの背景にこんなに広い数理と折紙に対するイメージがあることにあらためて何ともいえない喜

ど基本単位をいくつか組み合わせて大きな単位として用紙への埋め込みを考える、いわゆる分子のイメージは存在した。

「おりがみにおける角加減値の定義と応用」

しかし、どの三角形とどの三角形を一つの単位として考えて見るべきかを厳密に定義することは目黒氏の理論を待たなければならなかったのだ。そして、むしろ「分子論」が展開されてきて初めて「原子論」がそう呼ばれるにふさわしい領域を得たと言ってよいかもしれない。

続いて行われた目黒氏の講演は、参加者全員に紙とはさみを持ってもらっての実演まじりのものだった。内容は用紙に展開された折り線どうしの角加減値を定義する作業を詳細に説明するもので、工学的な色合いも感じられる。探偵団新聞の紙上でも連載されてはいたが、厳密な内容なので十分に紙面を割いて紹介したいとあらためて感じた。

(西川誠司)

びを感じた。個人的には生物の分化と折紙のアナロジーについて(フラクタルとの関係も含めて)興味があつたので、この点に触れてられて、思わず大きくうなずいてしまった。

折り線の為す不思議なイメージは笠原氏が紹介されたドーナツ折り紙で頂点に達した。

前川氏の展開図による折り紙の理解は、最も基本的な単位である三角形に注目したことから「折り紙原子論」呼ぶことが出来るだろう。原子が集まれば分子になるという化学の世界のロジックを単純に当てはめれば、「折り紙分子論」が想起されよう。「ピバおりがみ」でも付加法な

日本語の全く解らない外人に、ろくに英語の話せない日本人が折紙を教えるのはなかなか骨でした。英語ができないから、「この角」や「この線」のような片言の単語で精一杯。かなり不安になりながらも、実際に彼と折ってみた。30分ぐらいかかったろうか、彼は何とか理解してくれたようだった。

外「うーん、難しい。でも、なんとか解った。練習して来よう。次回を楽しみにしてくれ。」

一週間後、彼は本当に作ってきた。

そして開口一番、外「見てくれ!先週教わった折り鶴だ!折れたぞ!」

しかし、それは「羽ばたく鶴」だった。その後、彼は他の折紙も折りたがった。英語講師の仕事も忘れ、ひたすら新しい作品に出会いたがった。折紙をみると、研修前は開始を忘れ、休憩では再開を忘れ、研修後は帰り損ねる始末。研修生があきれかえる中、彼一人悦に入っているようだった。

そんなある日、こんなことを言い出した。

外「鳥をもっと折ってみたい。動物もたくさん折ってみたい。部屋の中に折紙で動物園を作ってみたい。」

そして、彼は折紙の勉強を始めた。本を買い、毎日毎日、伝承折紙を折っていたようだが、勉強は遅々として進まなかった。そう、彼は、基本的な折り方を理解していなかったのだ。

ついに、彼との別れの時がきた。一端のオリガミアンとなり、来日しての最大の財産は「折紙」とまで言うようになった頃だった。

外「もうすぐ、故国に帰る。そして、折紙を中心に日本訪問記を書くつもりだ。アメリカの人たちにもっと折紙を知ってもらおうんだ。」

その後は、折紙を折りながら世界中を旅する。世界中に日本の折紙を広めるんだ。」

これが、彼の最後の言葉だった。そう熱っぽく、私に語りかけた。

そして、私の前から姿を消した。今から、数カ月前も前のことだった。その外人、いったい今はどこにいるのかと言うと、実はまだ会社に来て

木村哲夫

折紙ビギナー

西方見聞録

第2話 怪しい外人(下)

折紙と出会った外人の続きです。

彼は、折紙に妙に感銘を受けたようだった。「CRAZY!」の後にはひたすら無言でじっと見つめ続けていた。そして、深いため息をつき、おもむろにこう言った。

外「素晴らしい作品だ!ぜひとも折ってみたい。一折一折、細かく教えてほしい。」

ビ「これは元々の作品が良いんだ。まだ人に教えられるほど、上手に折れない。勘弁してほしい。」(と、断わってみたが、許してはもらえなかった。)

結局、何か教えることになってしまった。何を教えるか迷った。とりあえず一度折って見せたことのある「折鶴」を教えることにした(こんな時、何を教えるのが一番なのでしょう?)



新刊書紹介

ティラノサウルス全身骨格
バージョンアップのお知らせ

おりがみはうす ガレージブック
ティラノサウルス全身骨格
折図+正体折図

おりがみはうす刊 吉野一生・著
B-5判76ページ 定価1545円 送料
310円 昨年発行された同書のバー
ジョンアップ版。昨年発行された同
書は、手作りの本であったが、バー
ジョンアップされた新版は、カラ
ー写真表紙とともに正体ティラノサ
ウルスの作り方も紹介されている。
最近静かな折り紙ブームといわれて
いる中で、たびたびマスコミに登場
して話題をまわっているティラノサ
ウルスの全身骨格。その完成度の高さ
と作り応えのある作品は、まさに絶
品。マニアは勿論、折り紙に興味の
なかった方々からも多くの問い合わせ。
帆船作りの感覚で制作されている
ようだ。おりがみはうすのみの直
販となりますので、申込は送料を添
えて現金書留で直接おりがみはうす
に申し込み下さい。

ORIGAMI INSIDE-OUT (オリガミ インサイド アウト)

アントロール刊 ジョン・モン
トロール・著 A-4変形判120ページ
定価2163円送料 310円 ジョン・モ
ントロール氏の最近書。タイガー、
ホルスタイン、チェスボードなど、
紙の裏表が出る作品ばかりを集めた
ユニークな本。ここ何年か続けて来
日していたモンテロール氏、今年は
残念ながら来日されません。そんな
同氏の作品に触れることのできる貴
重な新刊書。

折紙探偵団 定例会の お知らせ

今回は8月28日(土)、9月25
日(土)です。多くの方々の参加お
待ちしています。以上!

発行・折紙探偵団

〒112 東京都文京区白山5-36-7
ギャラリーおりがみはうす内
Phone (03) 5684-6040
発行人・西川誠司
編集人・岡村昌夫

おりがみ

天馬とともに

北條高史

中学時代は作品をトントン相撲用
の人形に使われ(あの「イモムシ」
は強かったなあ)高校のときは美術
部の展覧会の受付に作品を出してお
いたらいつの間にか持っていかれて
しまったり(コラ、展示物だぞー!)と、
ごくごく普通の(?)創作活動
を続けてきたつもりである。

そうした中で、なぜか私は「天馬」
にこだわり続けている。私の創作歴
自体、天馬なしには存在し得なかつ
たと言えるほどである。思えば、創
作第一号が天馬であったし、高校時
代までに四種類、いろいろな本の影
響を受け、作風が変わるたびに天馬
も変わり続けた。

そして、偶然この文京の地に引
越してきて、偶然おりがみはうすの
存在を知り、全治二週間の大打撃を
うけてから、新たにふたつの作品が
生まれることになる。

初期のものは、今あらためてつ
くりなおしてみると怪しげな物体以外
のなにものでもないが、どの「天馬」
にも数えきれないほどの思い出が詰
まっている。もし機会がいただける
ならいつか書いてみたいと思っている。

ここまでとりつかれてしまったら
もう逃げられない。今日もまた、新
たな天馬との格闘が始まる。まだま

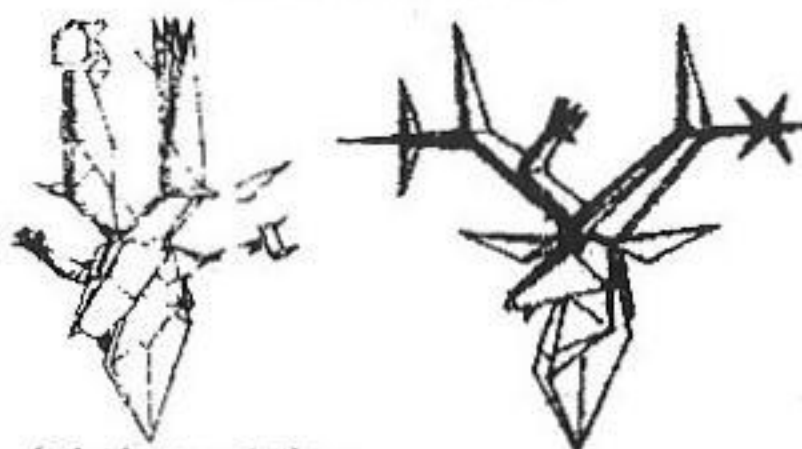
だ終わりそうにない

はじめましてまして、新入りの北
條です。現在大学生で(聞くところ
によると私は折紙協会と同年代だそ
うです)最近動物学教室でネズミ
の解剖に明け暮れています。おりが
みはうすの入口付近で私の代表作
「剣士」がふんぞり返っているよう
ですが、なんとか大目にみてやって
ください。

なにはともあれ、よろしくお願いします。
(一生つきまといそうだな、
こりや・・・)

追伸:川畑さんの「鹿」のツノの
先を五本指の「手」に改造してしま
いました。頭部のすげ替えにより二
種類の「怪しげな鹿」がたのしめる
お得な構造になっております。はっ
きり言って笑えます。うーむ大冒険。
(川畑さん、ゴメンナサーイ!)

〈あやしげな鹿〉



(1) まいったなー

(2) ひらきなおった!!

マスコミの大波

最近、折り紙が静かなブームだとい
われている。確かに我々も肌でそれ
を感じている。しかし、そのブーム
は過去にいわれたブームとは異なる
ように思われる。以前のブームは紙
が売れ、本が売れとといったブーム
であったように思うが、今のブーム
といわれているのは何か、見て楽し
んでびっくりする折り紙とでも表現
したらよいのか。おりがみはうすが
できてから4年が過ぎ、その間、毎
回300を越す案内を各マスコミにか
かすことなく送り続けてきた結果が
多少なりとも出てきたのではないか
と思われる。その結果、新聞、週刊
誌に紹介されない月はなく、テレビ

にも多く登場している。とくに6月
はテレビがいっぱいでジバング朝、
今日の出来事をはじめ、6回も画面
に登場。さらに、巨大マンタで大阪
のテレビ、新聞にも登場してしまっ
た。これからの予定にもCAZクオ
ークなどなど。目が離せない。

ギャラリー

おりがみはうす

個展案内

山田勝久おりがみ作品展

8月19日(木)~9月19日(日)
季刊「をる」でおなじみの若手オリ
ガミアンが個展を開きます。
「創作現在形」の”現在形”をご覧
下さい。